

それ五劫思惟の本願といふも兆載永劫の修行といふも、たゞわれら^{我等}一切衆生をあなたがちにたすけ給はんがための方便に、阿彌陀如來御身勞^{辛了超}ありて、南无阿彌陀佛といふ本願をたてましく、て、まよひの衆生の一念に阿彌陀佛をたのみまひらせて、もろくの雑行をすて、一向一心に彌陀をたのまん衆生を、もしたすけずんばわれも^{了超}正覺とらじとちかひ^給たまひて、南无阿彌陀佛となりましますなり。これすなはち、我等がたやすく極樂に往生すべきころなり、としるべきものなり。されば、南无阿彌陀佛の六字のころは、一切衆生の報土に往生すべきころなり。このゆへに、南无と歸命すれば、やがて阿彌陀佛のわれらをたすけたまへるころなり。このゆへに、南无の二字は衆生が彌陀如來にむかひたてまつりて、後生たすけたまへとたのみまふすころなり。^{るべし}（かやうに彌陀をたのむ人をもらさずすくひたまふころこそ、阿彌陀佛の四字のころにてはありけり、とおもふべきものなり。これによりて、いかなる

罪業ふかき十惡五逆五障三從の女人なりとも、もろくの雑行をすて、ひたすら後生たすけたまへとたのまん人をば、たとへば十人あらば十人ながら百人あらば百人ながら、みなことごとく（もらさず）たすけますべし。このをもむきをうたがひなく信ぜん^{輩は眞實の彌陀の淨土に往生す}ひとをば、信心決定の行人とまふしはんべるべきものなり。あなかしこく。

明應六年 二月十六日

康安寺本八、玄興寺本九。了西寺本一三、超願寺本一。名塩本四ノ八一、帖内五ノ八。帖内御文を以て傍記等を加ふ。年記は了西寺本にあり。

それ彌陀如來の本願と申す事は、末代惡世のあさましき身をすくひまします誓願なり。それにつきては、なにとやうにころをもち、又なにとやうに彌陀を信じまいらせて、今度の一大事の後生をばねがふべきぞといふに、なにのやうもなく、まづ我身の惡業煩惱の心をばうちすて、たゞ彌陀にまかせまいらせて、もろくの雑行の心をと

まめて、一すぢに彌陀如來今度の後生たすけたまへとひしとたのみ申さん人をば、あやまたずたすけたまふべきこと。さらにそのうたがひあるべからず。かやうにふかく信ぜん人をばもらさず御たすけあるべし。さてこののちには、南无阿彌陀佛くととなふべし。これを佛恩報盡の稱名念佛とは申すなり。このほかにはなにといふこともあるべからざるものなり。あなかしこく。

明應六年 四月廿七日

三河堤誓願寺本、小嶺淨専寺本(都路拾遺本二)、三河鳥山利兵衛本(續拾遺本三)、勝善寺本九、西蓮寺本一、一九、玄興寺本四、最勝寺本一四、蓮能寫本九、全集八七。

夫親鸞聖人のすめまします安心のをもむき(といふ)は、無智罪障の身のうへにをいて、なにのわづらひもなく、たゞもろくの雜行をすて、一心に阿彌陀如來に今度の一大事の後生たすけたまへと、ふかく彌陀を一念にたのみたてまつらん人は、たとへ

ば十人も百人も、みなおなじく淨土に往生すべきことは、さらうたがひあるべからざるものなり。このいはれをよく(しく)しりたる人をば、他力の信心を獲得したる當流の念佛行者といふべし。かくのごとく、よく決定せしめたる人のうへには、ねてもさめても佛恩報謝のために稱名念佛まふすべし。たゞし、これについて不審あり。そのいわれをいかんといふに、(すではや)一念に彌陀をたのみ(機の)うへには、あながちに念佛まふさずともときこえたり。さりながらこれをころうべきやうは、(すでに)われらごときのあさましき身の、なにのやうもなく、やすくたゞ彌陀を一念にたのみちからにて、報土に往生すべきことの、ありがたさたふとさよ、とくちに、(まふすべきを)南无阿彌陀佛くとまふせば、をなじころなるがゆへに、としるべきものなり。あなかしこく。

明應六年 十月十四日 至巳尅 書之

八十三歳 釋蓮如御判

彌陀大悲の誓願をふかく信ぜんひとはみなねてもさめてもへだてなく南无阿彌陀佛をととなふべし。

八十地あまりをくる月日はけふまでもいのちながら身さへつれなや

丹波最尊寺藏實如真筆本、名塩本三ノ三四、坊本六五、全集八九。類本多く、みな多少の異同あり、傍記及括弧内を以てその大概を示したり。左に異本を掲ぐ。

夫親鸞聖人のすゝめまします安心のおもむきといふは、無智罪障の身の上をひて、なにのわづらひもなく、たゞもろくの雑行をすて、一心に阿彌陀如來をたのみ奉て、後生たすけたまへとふかく彌陀を一念にたのみ奉らむ人は、たとへば十人も百人も、みなともに浄土に往生すべき事は、さらくうたがひあるべからず。このいわれをよくしりたる人をば、他力の信心を獲得したる當流の念佛行者と申すべし。かくのごとく眞實に決定せしめたる人のうへには、ねてもをきても佛恩報謝の(ために)稱名念佛申すべし。たゞし、これについて不審あり。そのいわれはいかんといふに、一

念に彌陀をたのみ(機)のうへには、あながちに念佛申さず。ともときこへたり。さりながら、これをこころうべきやうは、すでにあさましき我等なれども、なにのわづらひもなく、やすくたゞ彌陀を一念にたのみちからにて、報土に往生すべき事のありがたさたふとさよと、くちにいだして(も)申すべきを、(たゞ)南无阿彌陀佛くとまふせば、おなじこころにてあるなり、としるべきものなり(とこころうべし)。あなかしこく。

明應六年拾月十四日書之

(年齢)八十三歳 御判

あつらへし文のことの葉をそくともけふまで命あるをたのめよ

右東本願寺藏真筆本、名塩本三ノ三三、全集九〇。本善寺藏真筆本、名塩本三ノ三二、坊本六四一によりて傍記括弧内を加ふ。歌は名塩本三ノ三三、及坊本六四、全集九〇にあり。

夫當流聖人すゝめまします安心のおもむきは、在家無智の身のうへにをひては、なにの

わづらひもなく、たゞもろくの雑行をすて、一心に阿彌陀如來をたのみたてまつりて、後生たすけたまへとふかく彌陀を一念にたのみまひらせんひとは、たとへば十人も百人も、みなことごとく淨土に往生すべきことは、さらにうたがひあるべからず。このいはれをよくこゝろえたるひとを、他力の信心を獲得したる當流の念佛の行者といふべし。かくのごとく眞實に決定せしめたるひとのうへには、ねてもさめても佛恩報謝のために稱名念佛まふすべし。たゞし、これにつきて不審あり。そのいはれはいかんといふに、すでにはや一念に彌陀をたのみまふすうへには、あながちに念佛まふさずともときこえたり。さりながら、これをこゝろうべきやうは、かゝるあさましき罪業のわれらを、なにのわづらひもなくたゞ一念に彌陀をたのみちからにて、やすく彌陀の淨土に往生すべきことのありがたさうとさよ、とくちにいたしてもいくたびもまふすべきことなれども、たゞ南无阿彌陀佛くとまふせば、をなじこゝろにてある道理なれば、かやうにこゝろにいたしてもまふすべきものなり、とこゝろ

うべきなり。あなかしこゝ。

明應六年 十月十五日書之

八十三歳 御判

名塩本三ノ三五、右坊本六六、全集九一。

夫開山聖人のすゝめまします當流安心と申は、一念發起平生業成とたて、いかなる愚癡无智の身のうへにをひても、なにのわづらひもなく、たゞもろくの雑行をすて、一心に阿彌陀如來後生たすけたまへと、ふかく彌陀を一念にたのみたてまつらん人は、たとへば十人も百人も、みなことごとく淨土に往生すべきことは、更にそのうたがひあるべからざるものなり。この道理をよくこゝろえたるひとをこそ、信心獲得せしめたる當流の他力の行者とは申侍るべきものなり。かくのごとく決定したる人は、かならず行住座臥に佛恩報盡の稱名念佛申すべし。たゞし、就是不審あり。その謂れはいかんといふに、すでに一念に彌陀をたのみ機のうへには、あながちに念佛

申さずとも、ときこへたり。さりながら、これをこゝろうべきやうはいかんといふに、
すでにかゝる罪障のふかき身のうへにをひて、一念に彌陀をたのむちからばかり
にて、なにのわづらひもなくやすく報土に往生すべきことのありがたさたふとさよ。
といくたびもくちにいたして申すべきことなれども、たゞ南无阿彌陀佛くと申せ
ば、則おなじこゝろにてあるなりときけば、なをくたふとくおもひたてまつりて、
申すなりとしるべし。穴賢々々。

明應六年 十一月中旬

なきあとに 我れをわすれぬ 人もあらば たゞ(西)正 彌陀たのむこゝろをこせよ

右康安寺本一四、西蓮寺本一ノ二〇、三河正樂寺本(都路續拾遺本七)、名塩本三ノ三六、坊本六七、全集九五。

夫開山聖人のすゝめましますところの一流の安心とまふすは、無智罪障の身のうへ
にをいて、なにのやうもなく、たゞもろくの雑行をすて、一心に阿彌陀如來後生
たすけたまへと、ふかく彌陀を一念にたのみたてまつらんひとは、たとへば十人も百

人も、みなことごとく極樂に往生すべきこと、さらくうたがひあるべからざるもの
なり。この道理をよくしりたる人こそ、信心獲得せしめたる當流の他力の行者とは
まふしはんべるべきものなり。かくのごとくよくく決定したる人のうへには、ね
てもさめてもたゞ佛恩報盡のために、稱名念佛まふすべし。これについて不審あり。
そのゆへは、すでに一念に彌陀をたのむ機のうへには、あながちに念佛まふさずと
も、ときこえたり。さりながら、これをこゝろうべきやうはいかんといふに、すでにか
ゝる罪障の身ながら一念に彌陀をたのむちからばかりにて、やすく極樂に往生す
べきことの、ありがたさたふとさよとおもひて、口にいくたびもいだしてもまふす
べきを、たゞ南无阿彌陀佛くとまふせば、それがをなじこゝろにてあるなり、とこ
ゝろうべきものなり。あなかしこく。

明應六年 十一月廿日

右行徳寺道宗寫本一ノ八、堺本二ノ一〇、名塩本三ノ三七、坊本六八、全集九二。道宗本奥に云「以御筆直に

うつし申候也。正本は大和良次郎衛門殿にいまは山候也。科殿に

抑報恩講の事、當年より毎朝六ッ時より夕の六ッ時にをひてみなことごとく退散あるべし。このむねをあひそむかんともがらは、門徒たるべからざるものなり。夫當流開山の義は、餘の淨土宗にはおほきに義理各別にしてあひかはりたり。としるべし。されば當流の義は、わが身の罪障のふかきには、こころをかけずして、たゞもろくの雑行のこころをふりすて、阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、後生たすけたまへとまふすひとをば、かならず十人も百人もみなともにたすけたまふべし。これすなはち彌陀如來のちかひまします正覺の一念といへるはこのこころなり。としるべし。このこころを當流には一念發起平生業成とはまふしならふなり。しかれば、みなひとの本願をばたのむとはいへども、さらにおもひいれて彌陀をたのむひとなきがゆへに、往生をとぐることまれなり。このゆへに、今日今夜より一心に彌陀

陀如來(われらが)今度の後生たすけたまへとひしとたのみまいらせんひとは、このこころに往生すべきこと、さらにもてそのうたがひあるべからずとしるべし。このうへには行住座臥に稱名念佛(申)すべきものなり。これについて不審あり。そのいはれいかんといふに、一念に彌陀をたのむところにて往生さだまるときは、あながちに念佛まふさずともときこえたり。さりながら、これをこころうべきやうは、かゝる罪障のあさましき身なれども、一念に彌陀をたのむちからばかりにて、やすく報土に往生すべきことの、身にあまるありがたさたふとさよ、とくちにいだしていただくこともまふすべきことなれども、たゞ南无阿彌陀佛とまふせば、すなはち佛恩報盡のこころにあひあたれり、とこころうべきものなり。あなかしこく。

明應六年丁巳十一月廿一日

名塩本三ノ三八、堺本二ノ一一、坊本六九、全集九三。空善記(蓮如上行實)に云「明應六年十一月報恩講に御上洛なく候間、法敬坊御使として……御講を何と御さだめあるべきやと御たづね御申候に、當年より夕

べの六時朝の六時をかぎりみな退散あるべし、との御文をつくりて、かくのごとくめされべきよし御さだめあり云云。了西寺本一二、三河淨光寺本(都路遺捨本九)、玄興寺本二一には報恩講の事云々の前文なし。塚本以下諸本にて傍記等を加ふ。善巧寺本、西蓮寺本も前文なく且末文大に異なれり、左に別記す。

夫抑當流開山(聖人)の一義は、餘の淨土宗にはおほきに義理各別にしてあひかはりたりとしるべし。されば當流の義は、我身の罪障のふかきにはこころをかけずして、たゞ(下へ)もろくの雜行のこころをふりすて、阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、後生たすけたまへとまふすさんひとをば、かならず十人も百人も、みなことごとくともくにたすけたまふべし。これすなはち、彌陀如來のちかひまします正覺の一念といへるはこのこころなり、としるべし。このこころを當流には一念發起平生業成とはまふしすならふなり。しかれば、みなひとの本願をたのむとはいへども、さらにおもひいれて彌陀をたのむひとなきがゆへに、(眞實報土の)往生をとぐるひことまれなり。されば、一心といふうちには、もろくの雜行のこころをふりすてたるをこそ、一心とはいへるこころ申すなり。

されば、このこころの當流の念佛者しかの人々は、みなくこころをとめて(一心に阿彌陀(如來)をふかいたのみまいらせて、後生たすけ給へとおもはん人々は、かならず眞實報土の往生をとぐきこと、さらにそのわづらひうたがひあるべからざるものなり。あなかしこく。

右三河善巧寺本(都路拾遺本九)。西蓮寺本二ノ二三を以て傍記及括弧内を加ふ。

抑此在所大坂に於て何なる往昔の宿緣ありてか、既去ぬる明應第五之秋比より、かりそめながら如形一字之坊舎を建立せしめ、又當年明應六年之仲冬下旬の冬にいたり、且々周備満足の爲躰、誠に法力のいたりか、又念佛得堅固のいはれか。是併、聖人之御用にあらずや。依之、門徒之輩一同に不請造作に心をつくして粉骨をいたさしむる條、眞實まことに往生淨土ののぞみこれあるかのいはれか、殊勝に覺侍りぬ。然者、當年聖人の報恩講(中)より來集之門徒中、一向に往生極樂の他力信心を決定せとらしめて、今度の一大事の報土往生をとげしめたまはゞ、是併、今月廿八日の聖人之可相叶御本源

者哉。可信可喜。夫當流聖人の御勸化の安心といふは、あながちに罪障の輕重をいはず、たゞ一念に彌陀如來後生たすけたまへと歸命せん輩は、一人としても、報土往生をとげずといふことあるべからず、とをのく、こゝろうべし。このほかにはさらに別の子細あるべからず、とおもふべきものなり。あなかしこく。

明應六年十一月廿五日

行徳寺道宗寫本一ノ九、名塩本三ノ三九、坊本七〇、全集九四。堺本二ノ一二、玄興寺本二二一によりて傍記等を加ふ。道宗本奥に云、以御筆直うつし申候也。正本は加州寺井に御座候也。

當流のこゝろは一念^(最)發起平生業成とたて、諸の雜行をすて、一心に彌陀如來後生たすけたまへとふかくたのまん人は、かならず報土に往生すべきこと決定なり。これすなはち當流の平生業成の義なり。此上に念佛申は、彌陀如來のやすく御たすけにあづかりたる御恩の念佛なり、とこゝろうべきものなり。是則、當流の眞實

之義也。又は正覺の一念といふもこのこゝろなりとしるべし。

一、鎮西には當得往生とたて、來迎をたのむ家なり。是觀經之意也。
一、西山には即便往生とたて、三心だにも決定すれば、自餘の雜行をゆるし、來迎を本とする也。これも觀經の意也。

一、長樂寺には報土往生をたて、報土を本とするなり。こればかりは當流にをなじきなり。これも雜行をばゆるす也。

一、法性法身方便法身のこと。法身といふは無躰相也。

一、方便法身といふは應身^(報カ)如來のことなり。淨土の彌陀はみな方便法身なりとしるべし。

一、補處と云は彌勒のことを申なり。釋尊のあとをつぎて可有出世菩薩なれば、補處の菩薩と云也。惣て佛のあとをつぐによりて補處と云也。いまの念佛の行者も、彌勒の三會のあかつきさとりをひらくべきやうに、念佛者も一期の命つきて極樂に

往生すべきこと。彌勒にをなじきがゆへに。彌勒にひとしとはいふなり。あなかしこく。

明應六年

了西寺本二二、堺本二ノ七、最勝寺本四、名塩本三ノ三〇、坊本六二、全集九六上半。

當流の意は一念發起住正定聚とたて、もろくの雜行をすて、彌陀を一心にたのむ機は、正定聚のくらゐなれば、このいはれをもて一念發起平生業成とたてぬれば、これすなはちこの宗の安心決定の行者とはなづくべきなり。あなかしこく。

彌陀たのむこゝろばかりのたふとさに涙もよほす墨染の袖

あけくれは信心ひとつになぐさみて佛の恩をふかくおもへば

本誓寺本一ノ一四、了西寺本五、西蓮寺本一ノ五、玄興寺本二四、三河願誓寺本(都路拾遺本一〇)、名塩本四ノ四一、全集一五四。本章は年記を闕けども附載の歌によりて明應六年の所作と推定す。

いまの時の世にあらむ女人は、あひかまへてみなく心をひとつにして、一心に阿彌陀如來をふかくたのみたてまつるべし。そのほかにはいづれの法を信ずといふとも、後生のたすかるといふ事(丙)ことハ(淨)ゆめくあるべからずとおもふべし。されば彌陀をばなにとやうにたのみ(又淨)後生をばなにとねがふべきぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞ一心に彌陀をたのみ、後生たすけたまへ、とふかくたのみ申さむ人をば、かならず御たすけあらむ事(丙)こと(丙)は、さらく露ほどもそのうたがひあるべからざるものなり。このうへには、(はや)しかと御たすけあるべき事(丙)こと(丙)の御うれしさよともひて、佛恩報謝のために念佛申(丙)すべきばかりなり。あながしこく。

(八十三歳 御判)

本善寺藏眞筆本、三河淨願寺本(續拾遺本一一)、名塩本四ノ七九、坊本七九、全集九七。淨照坊藏眞筆本、本誓寺本二ノ二二、名塩本四ノ八〇、帖内四ノ一〇。帖内御文及淨照坊眞本にて傍記を加ふ。本善寺眞本、名

塩本四ノ七九及本誓寺本に年齢奥記なし。なほ外に類本あり。

それ悪人女人の身は、みなく、こゝろを一にして阿彌陀如來をふかくたのみたてまつるべし。そのほかには、いつれの法を信ずといふとも、後生のたすかるといふ事、ゆめく、あるべからず。しかれば、なにとやうに阿彌陀如來をば信じ、またなにとやうに後生をばねがひ候べきぞといふに、たゞ一心に阿彌陀如來後生たすけたまへとふかくたのみまふさん人をば、かならずたすけたまふべし。さらく、うたがふこゝろあるべからざるものなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ六七、全集一六五。

それ末代の悪人女人たらん輩は、みなく、心を一にして阿彌陀佛をふかくたのみたてまつるべし。そのほかには、いつれの法を信ずといふとも、後生のたすかるといふ事ゆめく、あるべからず。しかれば、阿彌陀如來をばなにとやうにたのみ後生をばねがふべきぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞ一心に阿彌陀如來をひしとたのみ、後生たすけたまへとふかくたのみ申さん人をば、かならず御たすけあるべき事さらく、うたがひあるべからざるものなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ八三、帖内五ノ一九。

信心獲得すといふは、第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうるといふは、南无阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり。このゆへに、南无と歸命する一念の^處ところ^に發願廻向のこゝろあるべし。これすなはち、彌陀如來の凡夫に廻向しますところなり。これを大經には、令諸衆生功德成就ととけり。されば、无始已來、つくりとつくる悪業煩惱を、のこるところもなく、願力不思議をもて消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退のくらゐに住すと^此なり。これによりて、煩惱を斷ぜずして涅槃をうといへるはこのこゝろなり。この義は當流一途の^所所談なるものなり。他流の^人ひとに對してかくのごとく沙汰あるべからざるところなり。よくく、こゝろ^能うべき

ものなり。あなかしこく。

明應六年

康安寺本九、超願寺本一四、勝善寺本二三、西蓮寺本一ノ一八、堺本二ノ八、名塩本四ノ三九、帖内五ノ五。帖内御文にて傍記す。年記は堺本及超願寺本にあり。類本あり。

信心獲得すといふは、第十八の願をこころうるなり。第十八の願をこころうといふは、南无阿彌陀佛のすがたをこころうるなり。このゆへに、南無と歸命する一念の所に發願廻向のこころあるべし。是則、彌陀如來の凡夫に廻向しますこころなり。これを経には、令諸衆生功德成就と^{かれた}けり。されば、無始已來の惡業煩惱は、のこる所もなく不思議の願力をもて消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退の位に住する(もの)なり。^{目下ナシ}このゆへに煩惱を斷ぜずして涅槃をうといへるはこのこころなり。これ當流一途の所談なり。(あなかしこく)。

右京都山田清吉氏藏眞筆本。名塩本四ノ三七、全集一五一一によりて傍記等を加ふ。年記なし。

信心獲得すといふは、第十八の願意をしるなり。此願を心得といふは、南无阿彌陀佛の躰をしるなり。このゆへは、南无と歸命する一念の所に發願廻向のこころあるべし。是則、彌陀如來の凡夫に廻向しますこころなり。これを経には、令諸衆生功德成就と^{かれた}けり。されば、無始已來の惡業煩惱は、のこる所なく不思議の願力をもて消滅するいはれあるがゆへに、正定聚不退の位には住する物なり。依之、煩惱を斷ぜずして涅槃をうといへるは此心なり。此義は當流一途の所談なり。あなかしこく。

右名塩本四ノ三八、全集一五二。

一念に彌陀をたのみたてまつる行者には、无上大利の功德をあたへたまふこころを和讃に聖人の^{いはく}云。

五濁惡世の有情の選擇本願信すれば不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみたり。

この和讃のこころは、五濁惡世の衆生といふは、一切我等女人惡人のことなり。されば、かゝるあさましき一生造惡の凡夫なれども、彌陀如來を一心一向にたのみまいらせて、後生たすけたまへ給とまふさんものをば、かならずすくひましますべきこと。さらうたがふべからず疑。かやうに彌陀をたのみまふすものには、不可稱不可説不可思議の大功德をあたましますなり。不可稱不可説不可思議の功德といふことは、かぎりもなき大功德のことなり。この大功德を一念に彌陀をたのみまふすわれら衆生に廻向しますゆへに、過去未來現在の三世の業障一時につみきえて、正定聚のくらゐまた等正覺のくらゐなるとにさだまるものなり。このこころをまた和讃にいはいはく、彌陀の本願信ずべし本願信ずるひとはみな攝取不捨の利益ゆへニテ等正覺無上覺ヲサトルにいたるなり、といへり。攝取不捨といふは、これも、一念に彌陀をたのみたてまつる衆生を光明のなかにおさめとりて、信ずること、ろだにもかはらねばすてたまはず、といふこころなり。このほかにいろくオホクの法門超西眞どもありといへども、たゞ一念に彌陀をたのみ衆

生はみなことごとく報土に往生すべきこと、ゆめくうたがふこころあるべからざるものなり。あなかしこく。

明應六年

堺本二ノ九、超願寺本一五、西蓮寺本一ノ三、眞宗寺本八、名塩本四ノ一、帖内五ノ六。年記は堺超願寺兩本にあり、名塩本には「八十四歳之御判」とあり。

抑干惡五逆五障三從の女人も、たゞもろくの雜行をすて、一心に彌陀の本願を信じ、阿彌陀如來今度の後生たすけたまへとふかくたのまん人は、みな極樂に往生すべきこと、さらくうたがひあるべからず。これすなはち、一念の往生さだまりたるこころなり、とおもふべし。このうへには、たゞねてもさめても、後生をやすくたすけます。彌陀如來の御恩のありかたさたふとさをおもひまひらせて、つねに念佛まふすべし。このほかには別の子細あるべからざるものなり。又人間のありさまは、や

まひにをかされば、すなはち往生すべしとおもふべし。さりながら、定業もきたらざれば、またとりなをすこともあるべし。さらにさだめなきことなり。よくよくこころをしづめて念佛申すべきものなり。あなかしこく。

明應七年二月日

超願寺本一八、三河圓覺寺本、常善寺本(都路續拾遺本二)、堺本二ノ一三、名塩本四ノ二、全集一一一。名塩本年記なく、「八十四歳書之御判」とあり。類本多し、左に掲ぐ。

抑十悪五逆の罪人も、五障三従の女人も、たゞもろくの雑行をすて、一向一心に彌陀の本願を信じて、阿彌陀如來後生たすけ給へとふかくたのまん人は、みなことごとく極樂に往生せん事、さらにそのうたがひあるべからず。これすなはち、我らが一念の往生さだまりたる心なり、とおもふべし。かやうにこころえたるうへには、ねてもさめても、彌陀如來の御たすけあるべき御恩のありがたさたふとさをおもひまいらせて、念佛申べし。このほかには別の子細あるべからざる、ものなり。あなかしこく。

明應七年二月日

右行徳寺道宗寫本二ノ一〇。奥書に云「以御筆御うつし候御本にてうつし申候也。正本は若狭小濱隼人殿に御座候也」。

抑十悪五逆の^{罪人}輩も、五障三従の女人も、たゞもろくの雑行のこころをうちすて、一すぢに彌陀の本願を信じ、(阿)彌陀如來後生たすけたまへ、とふかくたのまむ人は、みなことごとく極樂に^(法ナシ)往生すべき事、さらしくうたがひあるべからず。これすなはち、^(法)我らが一念の往生さだまりたるこころなり、とおもふべし。このうへには、たゞ^(法)行住座臥に、後生をやすくたすけます彌陀如來の御恩のありがたさたふとさをおもひまいらせて、^(法)(つねに)念佛申べし。このほかには別の子細あるべからざるものなり。あなかしこく。

(このころは八十地にあまる冬くれて春をもまたぬ老樂の身や)

明應七年九月廿八日書之

八十四歳

右行徳寺道宗寫本一ノ一〇。奥に云「右此如御文可有信心決定候能々此通門徒中可有勸化事肝要候。御判。上様の以御筆直うつし申候也。正本は加州本光寺候也」とありて實如の直筆を寫せるなり。西蓮寺本二ノ五、三河養樂寺本(都路拾遺本九)、超願寺本一七、玄興寺本二五、堺本二ノ一六、名塩本四ノ四六、四九、全集一五七、一五九一によりて傍記を加ふ。超願玄興堺三本に前記の歌一首年記の前にあり、餘本にはなし。又行徳寺道宗寫本三ノ一〇も堺本等に近し。奥に云「以御筆直に寫申候也。正本は山科法敬坊に御座候也」。少異を傍記せり。年記も歌もなし。

抑十惡五逆の罪人も五障三從の女人も、もろくの雜行をすて、一心に彌陀の本願を信じ、阿彌陀如來後生たすけたまへ、とふかくたのまむ人は、ことごとく極樂に往生すべき事、更さらにうたがひあるべからず。此心すなはち、我等(が)一念の往生(の)定りたる心なり、とおもふべし。これよりほかには別の子細あるべからざるものなり。此上には、ねてもさめても稱名念佛申すべきばかりなり。あなかしこく。

霜月廿日

右行徳寺道宗寫本三ノ四。奥に云「以御筆直うつし申候也。正本は越中牛丸教玄へ申請候。今は加州吉藤淨

通に有之」。名塩本四ノ四七、全集一五八一之に近し。少異を附記したり。

抑十惡五逆の人も五障三從の女人も、たゞこゝろを一にして、もろくの雜行をすて、彌陀の本願はたふときこと、信じて、阿彌陀如來後生御たすけ候へとふかくたのまん人は、みなことごとくなにのわづらひもなく極樂に往生すべきこと、さらにそのうたがひつゆちりほどもあるべからず。このこゝろすなはち、我等が一念の往生の定まりたるこゝろなり、とおもふべし。このほかには、ねてもさめても彌陀如來のやすく御たすけにあづかること、のありがたさををもひまいらせて、つねに念佛申すべし。このほかに別のことあるべからざるものなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ四八、全集九九。

夫五障三從の女人も十惡五逆の罪人も、もろくの雜行を(うち)すて、一心すぢに彌陀の本願をたのみ、阿彌陀如來に後生たすけたまへと申さん人は、みなことごとく彌陀の淨土に往生すべき事、さらにうたがふ心つゆほどももつべからず。是則、一念の

往生定りたる心なりと思ふべし。此上には、ねてもさめても後生(を)たすけまします彌陀如來の御恩のありがたさたふとさをおもひて、念佛申べきばかりなり。此外には別の子細ゆめくあるべからざるものなり。あなかしこく。

ほれくと彌陀をたのまん人はみなつみはほとけにまかすべきなり
つみふかきひとをたすくる法なれば彌陀にまかせ(され)るほとけあらじな

右行徳寺道宗寫本三ノ八、三河要屋休兵衛本(都路拾遺本一一)、名塩本四ノ三二、全集一四九。道宗本奥に云「以御筆直うつし申候也。正本は□葉慶雲所也」。三河本にて少異を傍記す。二首の歌は同本と思はる、西光寺本にあり。

それ五障三従の女人の身は、もろくの雜行をうちすて、一心に彌陀の本願をたのみ、阿彌陀如來このたびの後生たすけましますとふかく彌陀をたのまん人は、みなながら極樂にかならず往生すべきこと、さらくうたがふ心つゆほどももつべからず。そのうへには、ねてもさめても後生たすけまします彌陀如來の御恩のほどのありかたさたふとさよとおもひて、つねに念佛まふすべきばかりなり。このほかには別の

子細あるべからざるものなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ三〇、七二、坊本七四、全集一四八、一六八。

抑十惡五逆といふつみふかき人も、又五障三従の女人も、万事をなげすて、一心に彌陀如來(にむかひたてまつりて)このたびの後生(を)たすけ給へ、とひしとたのみ人(今度)は、十人も百人もみなともに極樂世界に往生すべき事、さらにうたがふ心つゆちりほどもあるべからず。このほかには、たねてもさめても南无阿彌陀佛くと申すころは、(なにとしたるころぞといふに)一念に(阿)彌陀如來をたのみたてまつるところに、(な)にのやうもなく(やすく)たすけまします、彌陀如來の御恩のありがたさたふとさをおもひまひらせて、念佛申すなり。これ(を)すなはち彌陀の御恩を報じ申す心なり、とおもふべきものなり。あなかしこく。

極月上旬第八日書之
明應七年 拾月廿八日

八十四歳書之 御判

右勝善寺本二、西蓮寺本一ノ二、名塩本三ノ五〇、全集一〇七。本誓寺本二ノ一五、西蓮寺本二ノ一一、最勝寺本一三一によりて傍記及括弧内を加ふ。

抑 毎月兩度の寄合の 由來は なにのためぞといふに、さらに他のことにあらず、自身の往生極樂の信心獲得のためなるがゆへなり。しかれば、往古よりいまにいたるまで(も)、毎月の寄合といふことは、いづくにもこれありといへども、さらに信心の沙汰としては、かつてもこれなし。ことに近年はいづくにも寄合のときは、たゞ酒飯茶なんどばかりにてみなく退散せり。これは佛法の本意には、しかるべからざる次第なり。いかにも不信の面々は、一段の不審をもたて、信心の有無を沙汰すべきところに、なにの所詮もなく退散せしむる條、しかるべからずおぼへはんべり。よくよく思案をめぐらすべきことなり。所詮自今已後に^ひをいては、不信の面々はあひたがひに信心を讚嘆あるべきこと肝要なり。

夫^{それ}當流の安心のをもむきといふは、あながちに我身^{わが}の罪障のふかきによらず、たゞもろくの雜行のころをやめて、一心に阿彌陀如來に歸命して、今度の一大事の後生たすけたまへ、とふかくたのまん衆生をば、ことごとくたすけたまふべきこと、さらにうたがひあるべからず。かくのごとくよくころえたる^人ひとは、まことに百即百生なるべきなり。このうへには、毎月の寄合をいたしても、報恩謝徳のためと、ころえなば、これこそ眞實の信心を具足せしめたる行者ともなづくべきものなり。あなかしこく。

明應七年 二月廿五日 書之

毎月兩度講衆中へ

八十四歳

了西寺本一一、眞宗寺本二六、堺本二ノ一四、名塩本三ノ四〇、帖内四ノ一二。帖内御文にて傍記す。

それ 一切の女人の身は、人しれず つみのふかきこと、上郎^藤にも 下主にも よらぬ、あさま

しき身なり。とおもふべし。それにつきては、なにとやうに彌陀を信じたてまつるべきぞといふに、なにのわづらひもなく、阿彌陀如來をひしとたのみまひらせて、今度の一大事の後生たすけたまへ。と申さん女人をば、あやまたずたすけましますべし。さて、わが身のつみのふかきことをばうちすて、彌陀にまかせまひらせて、もろくの雜行をすつべし。さて、(たゞ)一心に彌陀如來をたのみ今度の後生をたすけたまへとたのみ申さば、かならず彌陀はその身を(よく)しろしめしてたすけたまはんこと。うたがひあるべからず。(たとへば十人ありとも百人ありとも、みなことごとく極樂に往生すべきこと。さらにそのうたがふころつゆほどももつべからず)。かやうに信ぜん女人は、みなく淨土に往生すべし。(かくのごとくやすきことをいままて信じたてまつらざることのあさましさよとおもひて、なをくふかく彌陀如來をたのみたてまつるべきものなり)。あなかしこく。

明應七年 三月 日

名塩本四ノ二三、二五、全集一四七。超願寺本一六、堺本二ノ一五、玄興寺本一〇。名塩本四ノ二八、帖内五ノ一四。帖内御文にて傍記括弧内を加ふ。年記は堺本超願寺本にあり。名塩本二八には「大坂女講中に被下」と肩書あり。

當流安心之躰(といふ)事

南无阿彌陀佛の六字のすがたなり(としるべし)。この六字を善導(大師)釋していはく、言南无者 卽是歸命、亦是發願廻向之義。言阿彌陀佛者 卽是其行、以斯義故 必得往生、といへり。(まづ)南无といふ二字は、(すなはち)歸命といふころなり。歸命といふは、衆生の阿彌陀佛後生たすけ給へとたのみたてまつるころなり。又發願廻向といふは、たのむところの衆生を攝取してすくひたまふころなり。これすなはち、(やがて)阿彌陀佛の四字のころなり。されば、我ら(ごとき)愚癡闇鈍の衆生は、(なにところをもち、また彌陀をばなにとたのむべきぞといふに)、なにのわづらひもなく、もろくの雜行をすて、一向一心に後生たすけましますと彌陀をたのため

ば、決定極樂に往生すべき事こと、さらにそのうたがひなしあるべからず。このゆへに、南无の二字は、衆生の彌陀をたのむ機のかたなり。また阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけましまたまふすかたの法なるがゆへになれば、これすなはち機法一躰の南无阿彌陀佛と申すまうこゝろなり。この道理あなるがゆへに、我ら一切衆生の往生の躰は南无阿彌陀佛なり、とこゝろきこえたりうべきものなり。あなかしこく。

明應七年 戊午 卯月十日 書之

八十四歳 御判

行徳寺道宗寫本二ノ一、玄興寺本一、名塩本三ノ四三。道宗本奥に云「以御筆御寫候御本ニテ又ワツシ申候。正本ハ富田殿様之御内駿河殿に御座候也」。名塩本奥記を「明應七年孟夏中旬八十四歳老納」に作る。堺本二ノ一八、帖内四ノ一四一は本章の修正文なり。帖内御文を以て傍記及括弧内を加へたり。左掲の善巧寺本(都路拾遺本一八)、全集一八三―は初稿か。

他力信心の躰といふ事

南无阿彌陀佛といへるがすなはち信心なり。これを善導釋して曰、言南无者 卽是歸

命、亦是發願廻向之義。言阿彌陀佛者 卽是其行、以斯義故 必得往生、と釋せり。南无といふ二字は、すなはち歸命のこゝろなり。歸命といふこゝろは、阿彌陀佛後生たすけたまへとたのむこゝろなり。さて阿彌陀佛の四字は、南无とたのむ衆生をすなはちすくひたまふこゝろを、阿彌陀佛とは申すなり。されば、われらごときの愚癡の衆生はなにとこゝろをもち、彌陀をなにとたのむべきぞといふに、もろくの雜行をすて、一心に後生をたすけたまへと彌陀をたのめば、かならず御たすけあるべし。このゆへに、南无の二字は、衆生の彌陀をたのむ機なり。さて、阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけたまふ法なり。これをすなはち機法一躰の南无阿彌陀佛と申なり、としるべし。あなかしこく。

夫秋去り春去り、既に當年は明應弟七 孟夏仲旬比になりぬれば、予が年齢 つもりて八十四歳ぞかし。而に、限當年 ことのほか病氣にをかさるゝ間、耳目手足 身躰不易心

之間、是併、業病のいたり也。又は往生極樂の先相なり。と令覺悟處也。依之、法然上人の御詞に云、欣淨土行人、得病患偏樂之。とこそ仰せられたり。しかれども、あながちに病患をよろこぶ心更もてをこらず、あさましき身なり、可耻可悲者歟。さりながら、予が安心の一途、一念發起平生業成の宗旨にをひては、令一定間、佛恩報盡の稱名は行住座臥に不忘、こと无間斷。就其、こゝに愚老一身の述懷有之。

以上塚本已下諸本みな左の如く延書に改む。

「夫秋さり春さり、すでに當年は明應弟七、孟夏仲旬ごろになりぬれば、予が年齢つもりて八十四歳ぞかし。しかるに、スデニ(西)當年にかぎりて、ことのほか病氣にをかさるゝ、あひだ、耳目手足、身體、こゝろやすからざるあひだ、これしかしながら、業病のいたりなり。または往生極樂の先相なり、と覺悟せしむるところなり。これによりて、法然聖人の御詞に、いはく、淨土をねがふ行人は、病患をえてひとへにこれをたのしむ、とこそおほせられたり。しかれども、あながちに病患をよろこぶこゝろさらにもてをこらず、

あさましき身なり、はづべしかなしむべきもの歟。さりながら、予が安心の一途、一念發起平生業成の宗旨にをいては、いま一定のあひだ、佛恩報盡の稱名は行住座臥にわすれざる、こと間斷なし。これについて、こゝに愚老一身の述懷、これあり」。

其謂は、われら居住の在所々々の門下の輩にをひては、おほよそ凡心中をみをよぶに、とりつめて信心決定のすがた、これ是なし、と思ひ侍べり。おほきに、なげき、おもふところなり大に歎き思ふ所也。そのゆへは、愚老すでに八旬の齡、すぐるまで存命せしむるしるしには、信心決定の行者繁昌ありて、こそ命ながきしるしとも、おもひ侍べるべきに、さら更にしかくとも、令決定すがた、これなし、と見及べり。そのいはれ其謂をいかんといふに、抑人間界の老少不定の、ことをおもふにつけても、いかなる病をうけてか死せんや。かゝる世の中の風情なれば、いかにも一日も片時もいそぎて信心決定して、今度の往生極樂を一定して、そのち人間のありさまにまかせて、世をすごすべきこと肝要なり、とみなく、こゝろうべし。この趣を心中におもひいれて、一念に彌陀をたのむ心を、こゝろかかくをこすべきものなり。あなか

しこく。

明應七年 初夏仲旬弟一日

八十四歳老納書之

彌陀の名をきゝうることのあるならば 南无阿彌陀佛とたのめみな人

名塩本三ノ四一、堺本二ノ一七、西蓮寺本一ノ二六、玄興寺本一、帖内四ノ一三。帖内御文にて傍記す。

それ一切の女人の身は、上下をいわず つみのふかき身なり。まづ、佛法を信せんや
うは、もろくの雑行の心をば(うち)すて、たゞひとへに彌陀如來後生(を)たすけ
たまへ、とひしとたのまん女人の身をば、かならずよく、しろしめして、御たすけにあ
づかりて、極樂に往生せん事は、つゆちりほどもうたがふ心あるべからざるものなり。
かやうによく心へて信をとらん女人は、ねてもさめても此(この)ありがたさ御うれしさ
をおもひまいらせて、つねく念佛申べきばかりなり。このほかには別の事あるま

からざる
じきなり、とこゝろうべきものなり。あなかしこく。

明應七年 四月廿五日 書之

(われなくばたれも心をひとつにて 南无阿彌陀佛とたのめみな人)

行徳寺道宗寫本二ノ一二。奥に云「以御筆御寫候御本」(にて又うつし候)正本は左衛門大夫殿に御座候。歌なし。行

徳寺藏眞筆本、三河念空寺本(都路拾遺本二二)、名塩本四ノ二四、全集一四六一によりて括弧内及傍記を加

ふ。年記なし。

抑今日の聖教を聽聞のためにとて 皆々これへ御より候ことは、信心の謂れをよく
くこゝろえられ候て、今日よりは御こゝろをうかくと御もち候はで、きゝわけら
れ候はでは、なにの所用もなきことにてあるべく候。そのいはれをたゞいままふす
べく候。御耳をすましてよくくきこしめし候べし。

夫安心と申は、もろくの雑行をすて、一心に彌陀如來をたのみ、今度の我等が後
生たすけたまへと申すをこそ、安心を決定したる行者とは申候なれ。此謂れをし

りてのうへの佛恩報謝の念佛とは申すことにて候なり。されば、聖人の和讃にも、智慧の念佛うることは法藏願力のなせるなり信心の智慧にいりてこそ佛恩報ずる身とはなれ、と仰られたり。このころをもてころえられ候はんこと肝要にて候。それについて、まづ「念佛の行者南无阿彌陀佛の名號をきかば、あははやわが往生は成就しにけり、十方衆生往生成就せずは正覺とらじとちかひたまひし、法藏菩薩の正覺の果名なるがゆへに、とおもふべし」といへり。又「極樂といふ名をきかば、あは我往生すべきところを成就したまひにけり、衆生往生せずは正覺とらじとちかひたまひし、法藏比丘の成就したまへる極樂よ、とおもふべし」。又「本願を信じ名號をとなふとも、餘所なる佛の功德とおもひて、名號に功をいれなば、などか往生をとげざらん、なんどおもはんは、かなしかるべきことなり。ひしと、われらが往生成就せしすがたを南无阿彌陀佛とはいひける、といふ信心をこりぬれば、佛躰すなはちわれらが往生の行なるがゆへに、一聲のところに往生を決定するなり」。このころは安心を

とりてのうへのことどもにて侍べるなり、ところえらるべきことなり、とおもふべきものなり。あなかしこく。

明應七年 五月下旬

夏の御文第一。名塩本三ノ四四、全集一〇〇。安心決定抄引用の所を示せり。

抑今日御影前へ御まいり候面々は、聖教をよみ候を御聽聞のためにてぞ御入候らん。されば、いづれの所にて聖教を聽聞せられ候ときも、その義理をき、わけらるる分も更に候はで、たゞ人目ばかりのやうにみなく、あつまられ候ことは、なにの篇目もなきやうにおぼへ候。夫聖教をよみ候ことも、他力の信心をとらしめんがためにこそよみ候ことにて候に、更にその謂れをき、わけ(られ)候て、わが信のあさきをもなをされ候はんことこそ、佛法の本意にてはあるべきに、毎日に聖教があるとして、しるもしらぬもよられ候ことは、所詮もなきことにて候。今日よりしては

あひかまへてその謂れをき、わけられ候て、もとの信心のわろきことをも人にたづねられ候てなをされ候はでは、かなふべからず候。その分をよくく、こころえられ候て聽聞候はゞ、自行化他のため可然ことにて候。そのとをりをあらまし、只今申侍るべく候。御耳をすまして御き、候へ。

夫安心と申は、いかなる罪のふかき人も、もろくの雜行をすて、一心に彌陀如來をたのみ、今度の我等が後生たすけたまへとまふすをこそ、安心を決定したる念佛の行者とは申すなり。この謂れをよく決定してのうへの佛恩報謝のためといへることにては候なれ。されば、聖人の和讃にもこのこころを、智慧の念佛うることは法藏願力のなせるなり、信心の智慧なかりせばいかでか涅槃をさとらし、とおほせられたり。此信心をよくく、決定候はでは、佛恩報盡と申すことはあるまじきことにて候。なにと御こころえ候やらん。この分をよくく、御こころえ候て、みなく、御かへり候はゞ、やがてやどく、にても信心のとをりをあひたがひに沙汰せられ候て、信心決定

候はゞ、今度の往生極樂は一定にてあるべきことにて候。あなかしこく。

明應七年 五月下旬

夏の御文第二。名塩本三ノ四五、全集一〇一。

抑今月は既に前住上人の御正忌にてわたらせおはします、あひだ、未安心の人々は信心をよくく、とらせたまひ候はゞ、すなはち今月前住の報謝ともなるべく候。されば、この去ぬる夏(の)比よりこの間にいたるまで、毎日に如形耳ぢかなる聖教のぬきがきなんどをえらびい出して、あらく、よみ申すやうにさふらふといへども、來臨の道俗男女を凡、みをよび申し候に、いつも躰にて更にそのいろもみえましまさず、とおぼへ候。所詮、それをいかんと申し候に、毎日の聖教になにたることを、たふときとも又殊勝なるとも申され候人々の一人も御入候はぬ時は、なにの諸篇もなきことにて候。信心のとをりを又ひとすぢめを御き、わけ候てこそ、連々の聽聞の一か

どにても候はんずるに、うか／＼と御入候 躰たらく、言語道斷 不可然覺へ候。たとへば、聖教をよみ候と申すも、他力の信心をとらしめんがためばかりのことにて候間、初心のかた／＼は、あひかまへて今日のこの御影前を御たちいで候はゞ、やがて不審なることをも申されて、人々にたづね申され候て、信心決定せられ候はんずることこそ、肝要たるべく候。その分(を)よく／＼御こゝろえあるべく候。それにつき候ては、なにまでも入候まじく候。彌陀をたのみ信心を御とりあるべく候。その安心のすがたをたゞいま、めづらしからず候へども、申すべく候。御こゝろをしづめねふりを覺して、ねんごろに聽聞候へ。

夫親鸞聖人のすゝめまし／＼候 他力の安心と申は、なにのやうもなく一心に彌陀如來をひしとたのみ、後生たすけたまへと申さん人々は、十人も百人ものこらず極樂に往生すべきこと、さらにそのうたがひあるべからず候。この分を面々各々に御こゝろえ候て、みな／＼本々へ御かへりあるべく候。あなかしこ／＼。

明應七年 六月中旬

夏の御文第三。名塩本三ノ四六、全集一〇二。

抑今月十八日の前へに安心の次第あらく、御ものがたり申候處に、面々聽聞の御人數のかた／＼いかゞ御こゝろえ候や、御こゝろもとなくおぼへ候。いくたび申てもたゞおなじ躰に御きゝなし候て(は)、毎日にをひて隨分勘文をよみ申候その甲斐もあるべからず、たゞ一すぢめの信心のとをり(を)御こゝろえの分も候はでは、更々无所詮ことにて候。されば、未安心の御すがた、人目ばかりの御心中を御もち候かた／＼は、毎日の聖教には中々聽聞のこと无益か、とおぼへ候。その謂れはいかんと申候に、はや此夏中もなかばは、過ぎて、廿四五日の間の事にて候。又上來も毎日聖教の勘文をえらびよみ申候へども、たれにても一人として、今日の聖教にないと申したることのたふときとも又不審なるとも、おほせられ候人數一人も御入候

はず(候)。此夏中と申さんもいまのことにて候間、みなく人目ばかり名聞の躰た
らく、言語道斷あさましくおぼへ候。これほどに毎日耳ぢかに聖教の中をえらびい
だし申候へども、つれなく御わたり候こと、誠にことのたとへに鹿の角をはちのさし
たるやうに、みなくおぼしめし候間、千万く无勿躰候。一は無道心一は無興隆
ともおぼへ候。此聖教をよみ申候はんも、いま卅日の内のことにて候。いつまでの
やうにつれなく御心中も御なをり候はでは、眞實々々無道心に候。誠に、たからの山
にいりて、手をむなしくしてかへ(りた)らん、ひとしかるべく候。さればとて、當流
の安心をとられ候はんにつけても、なにのわづらひか御わたり候はんや。今日より
してひしとみなくおぼしめしたち候て、信心を決定候て、このたびの往生極樂を
おぼしめし、さだめられ候はゞ、誠に上人の御素意にも本意とおぼしめし候べきもの
なり。

この夏の初よりすでに百日のあひだ、かたのごとく安心のおもむき申候といへども、

誠に御心に おもひいれられ候すがたも、さのみみえたまひ候はず おぼへ候。すでに
夏中と申も今日明日ばかりのことにて候。こののちも此間の躰たらくにて御入あ
るべく候や、あさましくおぼへ候。よくく安心の次弟人にあひたづねられ候て、
決定せらるべく候。はや明日までのことにて候間、如此かたく申候なり。よくく
御ころえあるべく候也。あなかしこく。

明應七年 七月中旬

夏の御文第四。名塩本三ノ四七、全集一〇三。この御文後段「この夏の初より」以下は別に別の御文なり、何
故に合併せられたる歟。寶景師は文意より判じて前文は六月廿一日、後文は七月十四日の御作と推定せり。

抑たゞいまこのあなたのひろ縁にきたりあつまる人々は、要(界)なにの用ありてかよな
くにかぎりあつまるぞ、とおもふに、おほよそ佛法の次弟聽聞のころざし歟。
そのほかはなにの所用ぞや。そのころざしならば、安心の肝要のころえのやうを

かたるべし。それをよくく耳にたちて、われくの家々へかへるべし。夫當流の安心といふは、なにのやうもなく一向に、彌陀如來このたびの後生御たすけ候へ、とひしとたのまん人々は、みなともに極樂に往生すべきことうたがひなし。たゞし、もろくの雜行のころをふりすて、一心にかたまりて彌陀をたのまば、十人も百人もことごとく報土に往生せんこと、一定にてあるべし。この分をよくくころえわけて、みなくかへりたまふべし。あなかしこく。

明應七年 九月 日

超願寺本一九、堺本二ノ一九、名塩本三ノ四九、全集一〇五。

抑毎朝此道場へ來集の人数にをいては、相搦て心にしかとおもひたもつべきやうはいかんといふに、すでに彌陀如來の本願と申すことは、われら一切衆生を平等に極樂に往生せしめんがために、をこしたまへる誓願なり、と信じて、さて一念に彌陀

をふかくたのみ、このたびの後生あやまたずたすけたまへと信じたてまつるほかに、更に別のことあるべからず、と信ずべきものなり。これすなはち眞實の信心をえたる人ぞ、とおもひさだめてよりのちは、たとひいかなる人の申しさまたぐることありといふとも、これを信用すべからず。このうへには、行住座臥時處諸縁をきらず、ありがたくたふとくおもふころあらん時は、稱名念佛まうすべきばかりなり。このほかには、少々のことをばあながちに耳にき、いるべからず。これすなはち當流の信心を獲得したる念佛の行者と(名)なづくべきものなり。あなかしこく。

明應七年 九月 日

超願寺本二〇、堺本二ノ二〇、玄興寺本二、三河淨顯寺本(都路續拾遺本六)、名塩本三ノ四八、全集一〇四。

抑男子も女人も罪のふかゝらむ輩は、諸佛の悲願をたのみても、いまの時分(は)末代惡世なれば、諸佛の御ちからにては、中くかなはざる時なり。これによりて、阿彌

陀如來と申奉るは、諸佛にすぐれて、十惡五逆の罪人を我ひとりたすけむといふ大願をおこしまして、阿彌陀佛となり給へり。この佛をふかくたのみ、御たすけ候へと申さむ衆生を、我たすけずは正覺ならじ、とちかひまします彌陀なれば、すでに我らが極樂に往生せむ事は更にうたがひなし。このゆへに、一心一向に阿彌陀如來たすけ給へ、とふかく信じて、我身の罪のふかき事をばうちすて、佛にまかせまいらせて、一念の信心さだまらむ輩は、十人は十人(ながら)百人は百人(ながら)、みな淨土に往生すべき事。(さらに)うたがふ心あるべからず。このうへには、なをくたふとおもひたてまつらむ時は、聲にいだして南无阿彌陀佛くと唱べし。これをすなはち佛恩報謝の念佛と申なり。(あなかしこく)。

本善寺藏眞筆本、名塩本四ノ三六。京都岡村嘉太郎氏藏眞筆本を以て傍記括弧内を加ふ。なほ類本あり。

抑男子も女人も罪のふかゝらむともがらは、諸佛の悲願をたのみても、いまの時分は末代惡世なれば、諸佛の御ちからにては、中くかなはざる時なり。これによりて、阿

彌陀如來と申奉るは、諸佛にすぐれて、十惡五逆の罪人を我たすけむといふ大願をこしまして、阿彌陀佛となり給へり。この佛をふかくたのみて、一念御たすけ候へと申さむ衆生を、我たすけずは正覺ならじ、とちかひまします彌陀なれば、我らが極樂に往生せん事は更にうたがひなし。このゆへに、一心一向に阿彌陀如來たすけ給へ、とふかく心にうたがひなく信じて、我身の罪のふかき事をばうちすて、佛にまかせまいらせて、一念の信心さだまらむ輩は、十人は十人(ながら)百人は百人(ながら)、みな淨土に往生すべき事。さらにうたがひなし。このうへには、なをくたふとおもひたてまつらむころの時、南无阿彌陀佛くと時をもいはずところをもきらず念佛申べし。これをすなはち佛恩報謝の念佛と申なり。あなかしこく。南无といふ二字のうちには彌陀をたのみころありとはたれもしるべしほれくと彌陀をたのまん人はみなつみはほとけにまかすべきなりつみふかきひとをたすくるのりなれば彌陀にまされるほとけあらじな

右大谷大學藏眞筆本、西蓮寺本二ノ一九、本誓寺本一ノ一〇、康安寺本一六、超願寺本一二、勝善寺本六、堺本二ノ四、最勝寺本九、名塩本四ノ三四、帖内五ノ四。傍記は帖内御文。三首の歌は西蓮寺本以下七本にあり、よりて本章が明應七年の御作なりと推定す。

抑男子も女人も罪のふかゝらむ輩ともがらは、諸佛の悲願をたのみても、いまの時分世は末代(春ナシ)悪世なれば、諸佛の御ちからにては、中々ひかなはざる時分なり。これによりて、阿彌陀如來と申奉るは、諸佛にすぐれて、十惡五逆の罪人を我たすけむんといふ大願をおこしましたして、阿彌陀佛となり給へり。この佛をふかくたのみて、一心念に佛御たすけ候給へと申さむ衆生を、我たすけずは正覺ならじ、とちかひまします彌陀なれば、我等(西)が淨土極樂に往生せん事むは更にうたがひなし。このゆへに、一心一向念に阿彌陀如來たすけ給へまとふかく心(春ナシ)にうたがひなく信じて、我身の罪のふかき事をばうちすて(西)佛にまかせまひらせて、一念の信心さだまらん輩は、十人は十人ながら(百人は百人ながら)、みな淨土に往生すべき事さら、更にうたがひなし。このうへには、なを(春ナシ)たふ

とくおもひたてまつらん心ころのおをこらん時は、南无阿彌陀佛くと、時をもいはず、ところ所をもきらはず、念佛まふすべし。これをすなはち佛恩報謝の念佛と申すなり、としるべし。あなかしこく。

右名塩本四ノ三五。西本願寺藏及大阪春田惣太郎氏藏兩眞筆本を以て傍記及括弧内を加ふ。

抑去ぬる比不思議なりしこと(塙)のありける(は)、和泉國(鳥)とつとりといふ在所(桑)に、くわ(志岐)はたのしき大夫といひし男の、年五十餘なりしが、成仁の子にはなれたるきざみ、あまりのかなしさに、所詮(粉)小河の觀音にまひりて後生(長)のことをいのり申す所に、示現あらたにかうふりけるは、汝後生を一大事とおもひて我にいのる間、まことにありがたきことなり。然者、紀伊國(尾)ながの權守といふものあり。その所にゆきて、後生の次弟を、あひたづぬべし、とおほせられける間、示現の旨にまかせて、かの權守の在所へゆきてあひたづぬるに、權守申しけるは、我らはくはしく佛法の次弟存知せざる

間、所詮和泉國海生寺の了眞の所へゆきて、くはしくたづぬべし。といひける間、かの了眞の所へまひりて佛法の次第たづね申所に、了眞のいはく、なにのやうもなかつた彌陀をふかくたのむべし。とくはしくかたりたまふところに、たちまちにたうとくおもひまひらせて、一向に往生決定仕候ぬ。その後、あまりに一心の往生治定せしめ候たうとさのあまり、とつとりの面々どもにかたり候處に、みなく信心決定仕候き。さるほどに、あまりのありがたさに、當年明應七年閏十月十九日に不圖(擧)風度おもひたちて、大坂殿へ、すゝめをき候ひつる人數の内、まづ尼一人女三人男四人あひともなひ、參詣申候ひけり。さるほどに、此ことを八十餘の人のきゝてかたりたまふ(やうか)間、佛法不思議とは申ながら、かゝる殊勝なることはさらになし。これについてもおもふやうは、諸國にをいて、さても佛法の棟梁をもちたまふ坊主分の人はおほく御入候べきなれども、はじめて人をすゝめたまふといふことを、我らも八十餘にまかりなり候へども、うけたまはり及ばず候。あさましく。まことに宿善とは申しながら、かやうの殊

勝のことをば今日はじめてうけたまはりはじめてこそ候へ。これにつけても、みなく他力の信心いそぎ決定めされ候て、今度の一大事の報土往生をとげましく候はゞ、自身得度(道擧)のためと申し、又は報恩謝徳の道理にもあひかなひましく候べきなり。よくく御心をしづめて御思案どもあるべく候ものなり。あなかしこく。

明應七年 閏十月下旬

名塩本三ノ五一、了西寺本二四、堺本二ノ二二、最勝寺本七、全集一〇八。

當流の安心(の一義)といふは、(たゞ)南無阿彌陀佛の六字のころなり。たとへば、南無と皈命すればやがて阿彌陀佛のたすけたまふころなるがゆへに、南無の二字は皈命のころなり。皈命といふは、衆生のもろくの雜行をすて、阿彌陀佛後生たすけたまへ、と一向にたのみたてまつるころなるべし。このゆへに、衆生をもらさず彌陀如來のよくしろしめして、たすけますころなり。これによりて、南無とたの

む衆生を阿彌陀佛のたすけまします道理なるがゆへに、南無阿彌陀佛の六字のすがたは、すなはちわれら一切衆生の平等にたすかりつるすがたなり、としらるゝなり。されば、他力の信心をうるといふも、これしかしながら南無阿彌陀佛の六字のこゝろなり。このゆへに、一切の聖教といふも、たゞ南無阿彌陀佛の六字を信ぜしめんがためなり、といふこゝろなり、としるべきものなり。あなかしこく。

明應七年十一月十九日

八十四歳 御判

行徳寺道宗寫本一ノ一一、名塩本三ノ五二、全集一〇六。道宗本奥に云「以御筆直寫申候也。正本ハ加州川原ノ妙覺候也」。本誓寺本一ノ二〇、超願寺本二六、勝善寺本一一、玄興寺本五、眞宗寺本五、名塩本四ノ六八、帖内五ノ九。帖内御文にて傍記等を加ふ。本誓寺以下諸本年記なし。名塩本三ノ五二は年記「十月十九日」に作る。

抑當國攝州東成郡生玉之庄内大坂といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけ

るにや、去ぬる明應弟五之秋下旬の比より、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、當年ははやすでに三年の歳霜をへたりき。これすなはち往昔の宿縁あさからざる因縁なり、とおぼえはんべりぬ。それについて、この在所に居住せしむる根元は、あながちに一生涯をこゝろやすくすごし、榮花榮耀をこのみ、又花鳥風月にもこゝろをよせず、あはれ无上菩提のためには、信心決定の行者も繁昌せしめ、念佛をも申さんともがらも出来せしむるやうにもあれかし、とおもふ一念のこゝろざしをはこぶばかりなり。又、いさゝかも世間の人など、偏執のやからもあり、むつかしき題目なども出来あらんときは、すみやかにこの在所にをいて執心のこゝろをやめて、退出すべきものなり。これによりて、いよく貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を決定せしめんこと、まことに彌陀如來の本願にあひかなひ、別しては聖人の御本意にたりぬべきもの歟。それについて、愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條不思議なり。まことに當流法義にもあひかなふ

歎のあひだ、本望のいたりこれにすぐべからざるもの不可過之者歎。然者、愚老當年の夏比ごろより違例せしめて、いまにをいてひ本腹復のすがたこれなし。つゝには當年寒中には、かならず往生の本懐をとぐべき條、一定とおもひはんべり。あはれく存命のうちにみなく信心決定あれかし。と朝夕おもひはんべり。まことに宿善まかせとはいひながら、述懐のころしばらくもやむことなし。又はまたこの在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし。あひかまへてくこの一七日報恩講のうちにをいてひ信心決定ありて、我人一同に往生極樂の本意をとげたまふべきものなり。あなかしこく。

明應七年十一月廿一日よりはじめて、これをよみて、人々に信をとらすべきものなり。

了西寺本二、眞宗寺本九、名塩本三ノ五三、帖内四ノ一五。帖内御文にて傍記す。

それ五障三従の女人たらむ身は、阿彌陀如來をふかくたのみて、後生たすけたまへ、と

おもふべし。されば、阿彌陀如來よりほかの諸佛は、一切の女人をば我ちからにてはたすくべからずといひて、すでにすて給へり。しかれば、阿彌陀佛おほせられけるは、諸佛のすてられたらむ女人をば我たすけずんば、いづれの佛かたすけたまはん、とおぼしめして、かたじけなくも无上の大願をおこして、我諸佛にすぐれて一切の女人をたすけんとして、五劫があひだ思惟し永劫があひだ修行して、三世の諸佛にすてられたる女人の成佛すべき、といへる大願ををこしましたして、我をたのまむ女人をばかならずたすくべし、とちかひたまひて、阿彌陀佛とはなりたまへり。これによりて、一切の女人たらん身は、ふかく彌陀如來をたのみまいらせて、後生たすけたまへ、と一念にふかくたのまむ女人は、かならずみな極樂に往生すべき事、さらにそのうたがひあるべからず。よくくこの道理をふかく信じて、一心一向に彌陀如來をたのみたてまつるべし。このほかには、なをおくふかき事あるべからざるものなり。あなかしこく。

明應七年戊午十二月日

願泉寺藏真筆本、本誓寺本一ノ二二、二ノ七、超願寺本二二、勝善寺本一〇、玄興寺本六、名塩本三ノ五五、四ノ三二、全集一〇。願泉寺真本、本誓寺本、名塩本四ノ三二一には年記なし。

南无阿彌陀佛の躰は、すなはちこれ願行具足のいわれなりとしるべし。また機法一躰ともこれをまふすなり。

夫衆生ありて南无と皈命すれば、すなはちこれ願のこゝろなり。抑歸命といふは、衆生の阿彌陀佛をたのみ後生たすけたまへとまふすこゝろなり。すでに南无と歸命するところにをひて、やがて願も行も機も法も一躰に具足する、いはれなるがゆへなればなり。これにより善導大師は、南无といふはすなはちこれ皈命なり、またこれ發願廻向義なり、と釋す。されば、南无と皈命するところに、すなはち願も行も具足せしむる道理なり、とこゝろは、われらもおなじく阿彌陀佛とならんとねがひ生たすけたまへとまふすこゝろは、われらもおなじく阿彌陀佛とならんとねがひ

まふすこゝろなり、とおもふべきものなり。あなかしこく。

予が身躰によそへてかくのごとくをかしき事をつらね侍べり。

老が身は六字のすがたになりやせむ願行具足の南无阿彌陀佛なり

右今度寒中法敬坊空善兩人來臨之間、爲其願行具足のいはれ書記之者也。能々可知之。

明應七年戊午十二月十五日

八十四歳 御判

法敬坊 兩人中へ
空善

超願寺本二二、本誓寺本二ノ二二、勝善寺本二二、玄興寺本三三、名塩本三ノ五六、全集一〇九。空善記(蓮如上人行實120)に「十二月まいり候ところによく下りたりと仰候き」とあり、此時與へらたるものなるべし。

抑當流にすゝめましますところの信心をとるといふは、すなはち我身のうへのつ
 みのとのふかきことをばまづうちすてゝ、それ彌陀如來とまふすは、その機をいへ
 ば十惡五逆五障三從のあさましき女人まで、ことごとくすくひまします不思議の本
 願なり、とふかくしりて、さてそのうへに、阿彌陀如來の本願をばなにとやうにたのみ、
 いかやうにこゝろねをももちて信じまひらせて、後生をばたすかるべきぞ、といふに、
 なにのわづらひもなく、こゝろをひとつにして、阿彌陀佛をたのみたてまつりて、うたが
 ふこゝろなくば、彌陀如來はかならず攝取の光明をはなちて、そのひかりのうちにお
 さまをきたまふべきこと決定なり。かくのごとくこゝろゑたらんひとは、すなはちこ
 れ眞實信心の行者なるべし。このうへになをこゝろうべきやうは、かゝる彌陀如來
 のわれらをやすくたすけましましたる、御恩のふかきことをつねにおもひたてまつ
 りて、佛恩報謝のためにはねてもおきてもたゞ念佛をまふすべきばかりなり。あら
 ありがたの彌陀如來の本願や。これによりて、かたじけなくもこの法を三國の祖師先

徳の次第相承して、われら凡夫にをひてねんごろにとききかしたまふは、まことに
 曠劫多生の宿縁のもよほすところなり。これすなはち、別して開山聖人のこの法を
 ときひろめたまはずは、われら迷倒の凡夫道法までも、このたびの報土往生の本意を
 たやすくとぐべきや、とおもふべきものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ一八、全集一四一。

又抑に(名九ニアリ)云、夫彌陀如來の本願とまふすは、なうにたる機の衆生をたすけたまふ給ぞ、ま
 たいかやうに彌陀をたのみいかやうにこゝろ心をもちてたすかるべきやらん。まづ
 機をいへば、十惡五逆の罪人なりとも五障三從の女人なりとも、さらにその罪業(の)
 深重にこゝろを(ば)かくべからず、たゞ他力の大信心ひとつにて眞實の極樂往生を
 とぐべきものなり。されば、その信心といふは、いかやうにこゝろをもちて、彌陀をば
 なにとやうにたのむべきやらん。それ信心をとるといふは、やうもなくたゞもろ

く、の雑行雑修 自力なんどいふ わろきこころ^心を 振りすて、一心に ぶかく 彌陀に歸するこころのうたがひなきを、眞實信心とはまふすなり。かくのごとく 一心にたのみ一向にたのむ衆生を、かたじけなくも 彌陀如來はよくしろしめして、この機を光明をもて^{はなち}ひかりのうち^中におさめをきましくて、極樂へ往生せしむべきなり。これを念佛の衆生を攝取したまふといふことなり。このうへには、たとひ 一期のあひだまふす念佛なりとも、佛恩報謝の念佛なり、とこころうべきなり。これを當流の信心をよくこころえたる 念佛の行者といふべきものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ九、康安寺本一七、全集一三五。名塩本四ノ六、帖内五ノ一五。帖内御文にて傍記等を加ふ。

その^(マ)他力の信心といふは、彌陀をたのむところの決定の一心なり。その歸命したてまつるといふ、そのほとけの御名をばなにとまふすぞ、といへば、南无阿彌陀佛とまふすなり。されば、この南无阿彌陀佛の六字を善導釋していはく、南无といふはすな

はちこれ 皈命、またこれ 發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはすなはちこれその行なり、この義をもてのゆへにかならず 往生することをうるなり、といへり。そのこころはいかんとなれば、南无と歸命する衆生を、阿彌陀佛の發願廻向とやすくたすけすくひたまへるこころなり。このいはれあるがゆへに、いかなる 十惡五逆の衆生罪人五障三従の女人も、一念の信心をおこして ぶかく 彌陀如來に 歸命したてまつれば、廣大の慈悲をたれましくて、たのみたてまつるところの衆生を、かたじけなくも 攝取の光明のなかにてらしをきましますなり。このたふとさのうみやまの御恩をば、^(名ナシ)晝夜朝暮には 南无阿彌陀佛くとくちにまかせてとなへたてまつりて、報盡まふすばかりなり。あら 殊勝の本願や、あら ありがたの念佛や。依之、こころえやすき信心をばはやく信じまいらするうへには、この信心のことはりをもち 他門のひとにあらはにまふすべきにあらず。また 南无阿彌陀佛といへるうへには、一切の諸神諸佛ももろくの 功德善根ものこころなくみなことごとくこもれるがゆへに、おろそ

かにそしり謗することゆめくあるべからず。このおもむきをよくこころえたらん
ひとは、まことにもて當流のおもむきをまもれるすがたなり。とこころうべきものな
り。あなかしこく。

高田本七ノ八、名塩本四ノ六六、坊本五六、全集一六四。本章の書出しより推するに前文闕けたる歟。

(南无阿彌陀佛之事)

夫南无阿彌陀佛と申すは、わづかに(そのかず)六字なれば、さのみ功能のあるべき
とも覺ず候。然ども、此六字の内にはをひて、无上甚深の利益の廣大なる由、内々承り
及候べり。(あはれ)くわしく愚癡のわれらにをしへたまひ候はゞ、忝く御慈悲と存ず
べく候。また他力の眞實信心安とやらんも、此六字(のこころ)にれりこもりたるなり、御流
安心決定の面々も一同に御物がたり候間、くわしく存知せしめたく候仕候て、今度の一大事の報
土往生を治定仕度存候間、あはれ慈悲哀愍をたれましくて、ねむごろに御をしへに

あづかり候はゞ、可然御慈悲と存じをき申すべく候なり。

答て云、我等もくはしく存知仕せしむる旨は候はなく候へねども、此比凡聽聞を耳にふれをき候の。おもむきを
かたのごとくかたり申すべきにて候。おぼろげに御き、候ては、我等が後日のあや
まりにもまかりなるべく候。(返々も)解脱の耳をそばだて、ふかく歡喜の思を御な
し候て、よくき御聽聞あるべく候。

抑まづこの南无阿彌陀佛と申す六字を大唐の善導大師釋していはく、南无といふは
歸命なり、またこれ發願廻向の儀なり、阿彌陀佛といふはその行なり、この儀をもて
のゆへに、かならず往生することをう、といへり。されば、この釋のこころ(を)はな
にと心得べきぞ、といふに、これに二の儀あり。一には歸命、二には發願廻向の儀(以下修正別記)
なり。これをこころうべきやうは、たとへば、一生造惡の愚癡の我等なれども、たゞな
のやうもなく一念に阿彌陀佛を、後生御たすけ候へと、一念にふかくたのみまひら
せんものをば、一定御たすけあるべきこと、更にうだがひあるべからず候。さてこ

そ不思議の願力とはこれをまふすなり。かやうに一念に彌陀をたのみたてまつるものには、殊勝の大利无上の功德を我等にあたへましますいはれあるがゆへに、无始よりこのかたの罪障ことごとくきえはて、正定聚不退轉のくらゐにかなひ候ものなり。このいはれこそ、すなはち南无阿彌陀佛の六字が我等が往生すべき支證にては候へ。別に南无阿彌陀佛をこゝろうべき道理にてはなきものなり。他力の大信心といふも此六字の名號をこゝろうるいはれなり。とこゝろえらるべきものなり。あなかしこく。

右を道宗本等は修正して、

「南无と歸命すれば、やがて阿彌陀佛のそのたのむ機をしろしめすなり。また歸命といふは、たすけたまへと申すこゝろなり。この歸命の衆生を彌陀のすくいましますこゝろが、すなはち發願廻向のこゝろなり。又發願廻向といふは、阿彌陀如來の御方より大善大功德をあたへたまふこゝろなり。この大善大功德を我等衆生にあたへ

ましますゆへに、无始曠劫よりつくりをきたる惡業煩惱を一時に消滅したまふゆへに、すでに我等が惡業のをそろしきつみことごとくみなきえて、すでに无上涅槃のくらゐにひとしきがゆへに、正定聚不退のくらゐにいたるとはいふなり。さればこそ、この南无阿彌陀佛の六字は我らが往生すべきすがたなり、といよくしらるゝものなり。又他力の信心をうるといふも、たゞこの南无阿彌陀佛の六字の内にみなこもれるものなり、とおもふべし。されば、かすはたゞ六字にてすくなけれども、その功能ふかき事はさらにきはほとりもなきいはれあるがゆへなり、としるべきものなり。

名塩本四ノ七六、坊本七七、全集一七〇。行徳寺道宗寫本三ノ六、名塩本四ノ七七、坊本七八、全集一七一によりて傍記及括弧内を加ふ。道宗本奥に云「以御筆直に寫申候也。正本は加州本覺寺に御座候也」。本章を再修して次の御文となりたるは明なり。

それ南无阿彌陀佛とまふす文字は、そのかずわづかに六字なれば、さのみ功能のあ

るべきともおぼへざるに、この六字の名號のうちには、无上甚深の功德利益の廣大なること、さらにそのきはまりなきものなり。されば、信心をとるといふも、この六字のうちにもれり、としるべし。さらに別に信心とて六字のほかにはあるべからざるものなり。

抑この南无阿彌陀佛の六字を善導釋していはく、南无といふは歸命なり、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはその行なり、この義をもてのゆへに、かならず往生することをう、といへり。しかれば、この釋のこゝろをなにとこゝろうべきぞといふに、たとへば我等ごときの惡業煩惱の身なりといふとも、一念阿彌陀佛に歸命せば、かならずその機をしろしめしてたすけたまふべし。それ歸命といふは、すなはちたすけたまへとまふすこゝろなり。されば、一念に彌陀をたのむ衆生に、无上大利の功德をあたへたまふを、發願廻向とはまふすなり。この發願廻向の大善大功德をわれら衆生にあたへましますゆへに、无始曠劫よりこのかた、つくりをきたる惡業煩惱をば

一時に消滅したまふゆへに、われらが煩惱惡業はことごとくみなきえて、すでに正定聚不退轉などいふくらゐに住す、とはいふなり。このゆへに、南无阿彌陀佛の六字のすがたは、われらが極樂に往生すべきすがたをあらはせるなり、といよくしられたるものなり。されば、安心といふも、信心といふも、この名號の六字のこゝろをよくよくこゝろうるものを、他力の大信心をえたるひととはなづけたり。かゝる殊勝の道理あるがゆへに、ふかく信じたてまつるべきものなり。あなかしこく。

右超願寺本八、了西寺本一九、名塩本四ノ七八、帖内五ノ一三。帖内御文にて傍記す。

南无阿彌陀佛の事

善導釋にいはく、南无といふはすなはちこれ歸命なり、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはすなはちその行なり、この義をもてのゆへに、かならず往生することうるなり、といへり。このこゝろはいかんといふに、いかなる罪惡衆生凡

夫なりとも、阿彌陀佛 たすけたまへと、一念にたのみたてまつらん衆生をば、よくしらしめして、无上大利 大功德力をわれらに廻向しますますゆへに、无始已來の 罪業はこ
となく消滅して、すでにすなはちのとき 正定聚 不退轉の位に住すべきなり。これ
すなはち 彌陀如來の 他力より 往生 さだめますすこゝろなり。これを 大經には 即
得往生 住不退轉 とときたまへり。あなかしこく。

勝善寺本二〇、光瑞寺本。本章の類本と覺しきものあり、左に掲ぐ。

南无阿彌陀佛の六字を 善導 釋して いはく、南无といふ二字はすなはちこれ 歸命な
り、又これ 發願廻向の 義なり、阿彌陀佛といふはすなはちその行なり、この義をも
てのゆへに、かならず 往生することゝるなり、といへり。このこゝろはいかんと
いふに、罪業深重の凡夫 なりといふとも、阿彌陀佛 後生 たすけ給へと、一念にたのみ
申さん 衆生をば、よくしらしめして、无上大利の 功德力を たのみ申す 我らに 廻向しま
しますなり。このゆへに、无始已來の 罪障 一時に 消滅して、正定聚 不退の位に いたる

べきなり。これすなはち 彌陀如來の 他力本願の こゝろなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ七三、坊本七五、全集一六九。

南无阿彌陀佛。此文 善導 釋して いはく、(名ナシ)言南无といふは、歸命といふこゝろなり。歸
命といふは、衆生の 阿彌陀佛 後生 たすけたまへとたのみ申すこゝろなり。阿彌陀佛
といふは、發願廻向といふこゝろなり。發願廻向といふは、阿彌陀佛を(と名)たのみ 衆生を
攝取して すぐひたまふこゝろなり。あなかしこく。

みなひとの 南无阿彌陀佛となふれば 南无阿彌陀佛に 生まれぬはなし

本誓寺本一ノ一三、善巧寺本(都路拾遺本三)、常善寺本(續拾遺本一〇)、了西寺本三、眞宗寺本三五、西蓮寺
本一ノ一五、名塩本四ノ三三、全集一五〇。歌は善巧寺本にあり。

夫 他力の安心といふは、南无と 歸命すれば 阿彌陀佛の 御たすけある 心なり。されば、

南无の二字は、阿彌陀佛後生たすけまませといへる心なり。又南无の二字は、衆生の阿彌陀佛をたのむ心なり。又阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生を光明の中に攝取したまふ心なり。このゆへに、安心といふは南无阿彌陀佛の六字の心なり。とはこゝろすべきものなり。あなかしこく。

行徳寺道宗寫本三ノ一、西蓮寺本一ノ二一、名塩本四ノ二二、全集一四五。道宗本奥に云「以御筆直うつし申候也。正本は加賀寺井に御座候」。

南无阿彌陀佛の六字のすがたは、一切衆生のはじめて往生をねがふ心なり。されば、南无の二字は、後生たすけたまへと彌陀をふかくたのみたてまつる心なり。又阿彌陀佛の四字は、たのむ我らをもらさずすくひまします心なり。是則南无阿彌陀佛としるべし。あなかしこく。

極樂は日にく近くなりにつりあはれうれしき老のくれかな

たのめとの教の法にひかれつゝ彌陀たのむ身となれるうれしさ

行徳寺道宗寫本三ノ七、善巧寺本、空念寺本(都路拾遺本一九)。道宗本奥に云「以御筆直寫申候也。正本は京六角藤次郎に所持候也」。歌は善巧寺本にあり。

右親鸞聖人の一流の勸化のこゝろは、おほよそ一念發起平生業成とたてゝ、もろくの雑行雑修のこゝろをすてゝ、一向に彌陀如來の不思議の願力なりと信じて、一念に彌陀に歸命の心ふたごゝるなくば、これすなはち一念發起の安心なり。やがて平生業成のこゝろなり。このうへには、いよく彌陀如來の御かたよりわれらが往生はさだめたまふなり。としらるゝものなり。さては佛恩のふかきこときはまりなきうへは、念佛をまふし、かの御恩をつねに報じたてまつるべきものなり。としるべし。このうへに念佛まふして彌陀の御恩を報じたてまつるは、自力なりといひ、またわがはからひなり。とまふさんは、おほきなるあやまりなり。よくくこゝろすべきこと

なり。あなかしこく。

名塩本四ノ五三、坊本四三、全集七五。坊本の年記「文明十八年」は何に據りたるか不審なり。

當流の安心のおもむきといふは、なにのやうもなく、わが身はいかなる罪業ふかくともそれをばうちすて、たゞ一心に彌陀如來を一念にふかくたのみまひらせて、後生御たすけ候へとまふさん衆生をば、十人は十人百人は百人ながらたすけたまふべし。これさらにつゆほどもうたがふころあるべからず。これを一念歸命の信心さだまりたる行者とはいふべきものなり。かくのごとくよくころえたる人を、一念發起住正定聚ともいひ、または平生業成の行人ともいへり。されば、たゞ一念に阿彌陀をたのみたてまつるころこそ肝要なり、ところうべし。さればこのほかに、彌陀如來のかやうにやすきたすけたまふ御恩には、つねに名號をとなふべきものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ一六、全集一三九。次に掲ぐるは本章の修正文なり。

當流の安心といふは、なにのやうもなく、もろくの雜行雜修のころをすて、わが身はいかなる罪業ふかくとも、それをば佛にまかせまひらせて、たゞ一心に阿彌陀如來を一念にふかくたのみまひらせて、御たすけさふらへとまふさん衆生をば、十人は十人百人は百人ながら、ことごとくたすけたまふべし。これさらにうたがふころつゆほどもあるべからず。かやうに信ずる機を、安心をよく決定せしめたる人といふなり。このころをこそ經釋の明文には、一念發起住正定聚とも平生業成の行人ともいふなり。されば、たゞ彌陀佛を一念にふかくたのみたてまつること肝要なりところうべし。このほかには、彌陀如來のわれらをやすきたすけます御恩のふかきことをおもひて、行住座臥坐につねに念佛をまふすべきものなり。あなかしこく。

右本誓寺本一ノ二三、眞宗寺本一、名塩本四ノ六九、帖内五ノ二一。傍記は帖内御文による。

當流の安心のをもむきは、なにのわづらひもなく在家止住の身は、一心一向に阿彌陀佛に歸命したてまつりて、我身の罪障の深重なることをもこゝろにかけず、たゞふかく彌陀如來にまかせまひらせて、かゝるあさましき機を本とたすけます本願なりと信じて、ふかくたのむ心の一分もうたがひなきこゝろの一念をこるとき、やがてわが往生はさだまるなり。されば、これを大經には即得往生住不退轉ともとき、又釋には入正定之聚とも釋したまへり。かくのごとくこゝろえてののちは一心に、彌陀如來のやすくたすけます御恩のありがたさたふとさのうへには、晝夜朝暮に稱名念佛申すべきばかりこそ、當流の眞實信心の行者とはいふべけれ。このほかにはさらにおくふかき安心としてはあるべからざるものなり。あなかしこく。

西蓮寺本一ノ二、名塩本四ノ一七、全集一四〇。類本多し、左に掲ぐ。

當流の安心のをもむきといふは、たとへば在家の身ならば、一心一向に阿彌陀佛をたのみたてまつりて、我身の罪障の深重なる事をばうちすて、心にかけて、ふかく彌陀如來にまかせまひらせて、かゝるあさましき我等を本とたすけます本願なり、と信じて、たのむ心の一念もうたがひなくば、やがて我往生はさだまりぬとおもふべし。これを經には即得往生住不退轉ともとき、又釋には入正定之聚ともいへり。かくのごとくこゝろえてののちは、彌陀如來の御恩徳のありがたさたふとさのうへには、行住座臥に稱名念佛を申すべきばかりなり。このほかにはさらに當流信心として別に沙汰する子細なきものなり。あなかしこく。

右三河淨顯寺本(都路續拾遺本五)、名塩本四ノ一九、全集一四二。

當流安心のをもむきといふは、たとへば在家の身ならば、一心一向に阿彌陀佛をたのみて、等(名二)我身の罪障。深重なることをばうちすて、ふかく彌陀如來にまかせまひらせて、かゝるあさましき機をたすけます本願なりと信じて、たのむ心の一念もうたがひなくば、やがてわが往生はさだまりぬ一定とおもふべし。これを經には即得往生住不退轉

ととき、また釋には一念發起(名二ナシ)入正定之聚「かやうにともいへり。かくのごとくこゝろえての
ちは、彌陀如來の御恩のありがたさたふとさのうへには、行住座臥に稱名念佛をまふ
すべきなり。このほかには當流にをひておくふかきことはなきものなり。あなか
しこく。

右康安寺本一、了西寺本二、勝善寺本一、願誓寺本、敬覺寺本(都路拾遺本二〇)、養樂寺本(續拾遺本一)、蓮
能所寫本七、玄興寺本三、名塩本四ノ一二、全集一三六。名塩本四ノ一四、全集一三八一を以て傍記す。

當流安心のおもむきといふは、たとへば在家の身ならば、一心一向に阿彌陀佛をふか
くたのみ、我身の罪障のふかきことをばうちすて、彌陀如來を一心一念にうたがふ
心の露ほどもなからんものは、やがて我往生はさだまりぬと思べし。されば、大經に
も是を即得往生住不退轉ともとき、釋には一念發起(名)入正定聚ともいへり。かく
のごとく心への後は、彌陀如來のこゝろえやすく御たすけある事のありがたさたふ
とさの上には、ねてもさめても名號をとなへ申べき(もの)なり。あなかしこく。

右行徳寺道宗寫本三ノ三、名塩本四ノ一三、全集一三七。道宗本奥に云「以御筆直うつし申候也。正本はつ
なかけ覺妙に御座候也」。

當流の安心とまふすは、一向に阿彌陀如來をたのみまひらせてふたごゝろのなきを、
本願を信ずる人とは申なり。かやうに心得さふらふ人は、必十は十ながら百は
百ながら、極樂に往生し佛になり候べきなり。このうへには、たとひ念佛を申すと
も、わが往生のためとは思べからずさふらふなり。されば、彌陀如來のかたじけなく
もかゝる悪人女人をたやすく助けまします、彌陀の御恩を報じたてまつる念佛なり
と心得たまふべきなり。このごとくにこゝろをもちさふらはぬ人をば、千が中にも万
が中にもひとりも極樂に往生せず、ととき(眞名)たまひ候なり。このこゝろをよく
くしらせたまひさふらふ人をば、信心決定したる人とこそ申さふらふなり。
あなかしこく。

西蓮寺本二ノ一六、一ノ六、鈴木左門治本(都路拾遺本二二)、眞宗寺本一一、名塩本四ノ二〇、全集一四三。

當流聖人のすゝめまします安心といふは、なにのやうもなく、まづ我身のあさましきつみのふかきことをばうちすて、もろくの雜行雜修のころをさしをきて、一心に阿彌陀如來後生たすけたまへ、と一念にふかくたのみたてまつらんものをば、たとへば十人は十人、百人は百人ながら、みなもらさずたすけたまふべし。これさらにうたがふべからざるものなり。かやうによくころえたる人を、信心の行者といふなり。さてこのうへにはなを、我身の後生のたすからん事のうれしさをおもひいださんときは、ねてもさめても南无阿彌陀佛くととなふべきものなり。あなかしこく。

眞宗寺本一二、名塩本四ノ一五、帖内五ノ一八。

末代無智の在家止住の男女たらんともがらは、ころをひとつにして阿彌陀佛をふ

かくたのみまひらせて、さらに餘のかたへころをふらず。一心一向に佛たすけたまへとまふさん衆生をば、たとひ罪業は深重なりとも、かならず彌陀如來はすくひましますべし。これすなはち第十八の念佛往生の誓願のころなり。かくのごとく決定してのうへには、ねてもさめてもいのちのあらんかぎり、稱名念佛すべきものなり。あなかしこく。

西蓮寺本二ノ一二、本誓寺本二ノ一七、超願寺本九、勝善寺本五、堺本二ノ一、玄興寺本八、名塩本四ノ四、帖内五ノ一。帖内御文にて傍記す。歡喜鈔に一本「文明六年三月三日清書之」と年記あるは何によりたるか知らず。

それ八万の法藏をしるといふとも、後生(世高、名四五)をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知(尼女、尼入道、名四五)の身なりといふとも、後世(生、名四五ノマ)をしるを智者とすといへり。しかれば當流の心は、あながちにものをしりたり、(又聖教をよむ人なり)といふとも、一念の信心(こ)のすがたを(ら)しらざる人は、いたづら事なり、としるべし。されば、聖人のおほせ(は)にいはいく、一切

の女人たらむの身は、彌陀の本願にあらすならでは、たすかるといふ事かへす、あるべからず、と(高アリ)思ふべし、(とのたまへり。このゆへに)、いかなる罪業ふかき女人なりといふとも、もろくの雑行の心をふりすて、一念に彌陀如來今度の後生たすけ給へ、とふかくたのみ申さんむ人は、たとへば十人も百人も、みなことごとく彌陀の報土に往生すべき事、さらく、そのうだがひあるべからざるものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ四三、全集一五五。高田本七ノ七、西蓮寺本一ノ一三、名塩本四ノ四五を以て傍記等を加ふ。

それ八万の法藏をしるといふとも、後生世をしらざる人をば、愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしる人を智者とす、といへり。しかれば、當流の心こころは、あながちにもろくの聖教をよみものをしりたりといふとも、一念の信心のすがたいはれをしらざる人は、いたづら事なり、とおもふべし。されば、上人聖の御ことばにも、一切の女人男女たらむ身は、彌陀の本願を信ぜずしてならでは、(ふつと)たすかるといふ事、すべてあるべからず、と思ふべし。(このゆへに)、いかなるつみふかき女人なり(といふ)

とも、もろくの雑行をすて、一念に彌陀如來今度の後生たすけ給へ、とふかくたのみ申さん人は、十人も百人も、みなことごとく彌陀の報土に往生すべき事、さらうたがひあるべからざるものなり。あなかしこく。

右名塩本四ノ四四、全集一五六。善性寺藏真本、超願寺本一〇、堺本二ノ二、玄興寺本二七、名塩本四ノ四二、帖内五ノ二一によりて傍記及括弧内を加ふ。

夫在家の尼女房たらん身は、なにのやうもなく一心一向に阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、後生たすけたまへと申さむものをば、悉御たすけあるべし、とおもひとりて、さらにうたがひのこころゆめく、あるべからず。是則、彌陀如來の御誓ちかひの他力本願まうとは申すなり。此上には、なを、後生のたすからん事ことのうれしさありがたさをおもはん時は、たゞ一向に念佛申べき物ものなり。あなかしこく。

南无阿彌陀佛(西ナシ)ととなふこれすなはち。行徳寺道宗寫本三ノ五。奥に云、「以御筆直にうつし申候也。正本は加州宮永專(西ナシ)に有之」。西蓮寺本二ノ一

七、本誓寺本二ノ六、超願寺本二一、堺本二ノ三、名塩本四ノ八六、帖内五ノ三。帖内御文にて傍記す。

夫女人の身は、五障三従として、おとこにまさりてかゝるふかきつみのあるなり。このゆへに、一切の女人をば十方にまします諸佛も、わがちからにては女人をばほとけになしたまふこと、さらになし。しかるに、阿彌陀如來こそ、女人をばわれひとりたすけんといふ大願ををこして、すぐひたまふなり。このほとけをたのまずは、女人の身のほとけになるといふことあるべからざるなり。これによりて、なにとこゝろねをもち、またなにと阿彌陀ほとけをたのみまひらせて、ほとけにはなるべきぞなれば、なにのやうもいらすたゞふたごゝろなく一向に阿彌陀佛ばかりをたのみまひらせて、後生たすけたまへとおもふこゝろひとつにて、やすくほとけにはなるべきなり。このこゝろのつゆちりほどもうたがひなければ、かならず極樂へまひりてうつくしきほとけとはなるべきなり。さて、このうへになをこゝろうべきやうは、ときく

念佛をまふして、かゝるあさましき我等をやすくたすけます。阿彌陀如來の御恩の御うれしさありがたさを報ぜんために、念佛まふすべきばかりなり。とこゝろうべきものなり。あなかしこく。

西蓮寺本二ノ七、本誓寺本一ノ五、名塩本四ノ二九、帖内五ノ七。帖内御文にて傍記す。

それ一切の女人の身は、後生を大事に思佛法をたふとく思心あらば、何の様なく阿彌陀如來をふかくたのみまひらせて、もろくの雜行をふりすて、一心に後生を御たすけ候へとひしとたのまん女人は、必極樂に往生すべき事、さらにうたがいあるべからず。加様に思とりてのちは、ひたすら彌陀如來のやすく御たすけにあづかるべき事の、ありがたさ、又たふとさよ、とふかく信じて、ねてもさめても南无阿彌陀佛くと申べき計也。是を信心とりたる念佛者とは申す者也。あなかしこく。

行徳寺道宗寫本三ノ九、眞宗寺本一三、名塩本四ノ二七、帖内五ノ一七。道宗本奥云「正本は瑞泉寺に御座候」。

帖内御文にて傍記す。

それ一切の女人たらん身は、彌陀如來をひしとたのみ、後生たすけたまへと申さん
 女人をば、かならず御たすけあるべし。さるほどに、諸佛のすてたまへる女人を、阿彌陀
 如來ひとり、我たすけずんば、またいづれの佛のたすけたまはんぞ、とおぼしめして、
 无上の大願ををこして、我諸佛にすぐれて女人をたすけんとして、五劫があひだ思惟し
 永劫があひだ修行して、世にこえたる大願ををこして、女人成佛といへる殊勝の願を
 をこします彌陀なり。このゆへに、ふかく彌陀をたのみ、後生たすけたまへと申
 さん女人は、みなく極樂に往生すべきものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ二六、帖内五ノ二〇。本章は「明應七年十二月日」附の御文(一五)と文意甚だ類似す、關係ある歟。

今此比の井中の在家の男女たらむ人(は)、諸の雜行をすて、一心に彌陀如來に向

ひ奉りて、今度の一大事の後生御たすけ候へ、とふかくたのみ申さむ衆生をば、みな
 ことごとく御たすけあるべき事、更にうたがふ心少もあるべからざる物なり。此
 外(には)何のわづらいもなきことなり。是を他方の信心を得たる人とはいふなり。
 此上には南无阿彌陀佛とねてもさめても申べき物也。此外には更に(なにの)わづ
 らわしき事、努々あるべからず、と思べきものなり。あなかしこく。

行徳寺道宗寫本三ノ二、名塩本四ノ八八、全集一七五。道宗本奥に云「以御筆すき寫の御本にて直寫申候也。
 正本は瑞泉寺に御座候也」括弧内は名塩本による。

それ末代惡世の男女たらむ身は、なにのわづらひもなく、もろくの雜行をうちすて
 、一心に阿彌陀如來後生たすけ給へ、とひしとたのみたてまつらむ人は、たとへば
 百人も千人も、のこらず極樂に往生すべきものなり。あなかしこく。

三河杉浦平治郎本(都路續拾遺本八)、名塩本四ノ八二、坊本八〇、全集一七二。

煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば

すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ

この和讃のこゝろは、たとへばいかなる悪業煩惱をもつ身なりとも、阿彌陀如來を
すぢにたのみ奉て、後生御たすけ候へたまとまふさむ衆生をば、すなはち有漏の穢身をす
てはて、彌陀の報土にまひりて、佛身佛果をえしめて、法性常樂といへるくらゐにい
たるべきものなり、としるべし。あなかしこく。

名塩本四ノ四〇、全集一五三。善巧寺本、專超寺本(都路拾遺本七)、三河青野善吉本(都路續拾遺本一三)、了
西寺本四、勝善寺本一七、西蓮寺本一ノ一〇一によりて傍記す。

夫當流之安心之趣といふは、あながちに捨家棄欲の心を表せず、又出家發心のすが
たをあらはさず、たゞもろくの雜行をすて、一向に阿彌陀佛に皈命して、今度の一

大事の後生たすけたまへ、と一心に阿彌陀如來をひしとたのみたてまつらん衆生を
は、なにのわづらひもなくたすけたまふべし、みなことごとく報土往生すべきこと。さ
らくうたがふべからざるものなり。されば、この心にみな人をもとづけんとしてこ
そ、いろくの癡立をたて、又もろくの聖教などいふこともいできたり。かや
うにこゝろえたる人こそ、正覺の一念に皈したる人ともいふなり。さるほどに、この
道里を一念き、て信をとる人もあり、又宿習といふことなき人は、いくたびき
ゝても、實に信をばとらぬ人もあり。かくのごとくこゝろえたる人を一念發起住正
定聚とも無上覺涅槃を證すと(も脱カ)なづくるなり。

飛驒高山別院(蓮照寺)藏眞筆本。原本に存する修正の跡を示す。

夫淨土眞宗者、顯淨土の中よりえらびいだしたまふところの元祖聖人の御一流なり。
ゆへいかなとなれば、大經云、如來以無蓋大悲、矜哀三界、所以出興於世、光闡道教、欲救群

萌、惠以眞實之利、といへり。こゝろは、如來無蓋の大悲をもて三界の衆生をあはれみて、世にいでたまふゆへは、ひろくまことのみちのおしへをひらきあらはして、愚縛の凡衆をすくはんとおぼして、智慧のひかりをもて眞實の利をおしへたまへり。その眞實の利といふは無上の大利なり。同じ經云、乃至一念、當知此人爲得大利、といへり。大利をうといふは、名號をきつて信心歡喜するもの、往生決定のひとなり、往生うたがはず。されば、无上大利の功德をえて、無上のひととなるなり。無上眞實の大利は他力本願なり。その他力といふはいかんとなれば、凡夫としてははからざることなり。彌陀如來の御こゝろよりおこりて、我等が往生はしたゝめたまふなり。われらがこゝろとして三毒の煩惱を眷屬として、朝夕のことわざには、殺偷姪毒のはげみおこたることなし。このこゝろにては、いかでか佛道にのぞまん、なんぞ極樂にいたらん。しかるに、彌陀は難化難入之衆生に心安く往生をえしめんとして、一念發起の信心をすゝめて、その身を攝取してすてたまはず。これひとへにわれとしておこさざる信心

なり、彌陀如來よりさづけたまへる信心なり、とこゝろうべし。これを他力をえたる信心といふなり。あなかしこく。

名塩本四ノ八、全集一三四。『顯淨土眞宗抄』に此御文を掲げて「文明七年五月廿日」の年記を附す。

凡當流之義、淨土一家之義には大に相違すべき也。當時はみな他流の義をもて親鸞聖人一流と號すと云云。以外の次第也。先親鸞聖人一流の意は、一念發起平生業成と立て、臨終を期せず來迎をたのまざるなり。されば、來迎方便得生眞實と沙汰する也。仍、一念歸命の信心決定して後の稱名をば、自身の往生を猶いのるこゝろあらば、それは自力なり。ひたすら往生は一念に決定と心得て、佛恩報謝の稱名とおもふべきなり。これすなはち、當流の信心發得の行者と云也。この上には、來迎と云事も臨終と云事も更にあるまじきもの也。

一、宿善によりて本願をば信ずる也。宿習なくば无上の本願も徒事なるべき也。

あなかしこく。

三河專超寺本(都路拾遺本六)、勝善寺本一三、光瑞寺本、名塩本四ノ二一上半、全集一四四上半。名塩本には
上文に連続して専光寺門徒の御文(187)の後半附記せらる。傍記は名塩本による。

夫人間の浮生なる相を、つらく観ずるに、「おほよそはかなきものは、この世の始中終まぼろしのごとくなる。一期ハノスゲルホドなり」。されば、「いまだ万歳の人身アをうけたりといふ事をきかず。一生すぎやすし、いまにいたりてたれか百年の形骸をたもつべきや。我やさき人やさき、けふともしらずあすともしらず、をくれさきだつ人はもとのしづくすゑの露よりもしげし、といへり」。されば、朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり。すでに无常の風きたりぬれば、すなはち「ふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつのいきながくたえぬれば」。「紅顔ソラニむなく、變じて、桃李のよそをいほいをうしなひぬるときは」。六親眷屬あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さ

てしもあるべき事ならねばとて、「野外にをくりて夜半のけふりとなしはてぬれば」。ルニハたゞ白骨のみぞのこれり。あわれといふも中々おおろかなり。されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛をふかくたのみまいひらせて、念佛まふすべきものなり。あなかしこく。

高田本七ノ九、了西寺本一〇、眞宗寺本三二、名塩本四ノ八九。「存覺法語」引用の跡を示す。又帖内五ノ一六にて傍記す。

侍能工商之事

- 一、〔西本了宮(本了)〕奉公官仕をし、弓箭を帶して、主命のために身命をもおします。
- 二、又耕作に身をまかせ、すきくわをひさげて、大地をほりうごかして、身にちからをいれて、ほりつくりを本として身命をつぐ。
- 三、或は藝能をたしなみて、人をたらし、狂言綺語を本として、浮世をわたるたぐひのみなり。

四に 一、朝夕は商に心をかけ、或は難海の波の上にうかび、おそろしき難波（西本了）にあへる事をかへりみず。

かゝる身なれども、彌陀如來の本願の不思議は、諸佛の本願にすぐれて、我らまよひの凡夫をたすけん、といふ大願ををこして、三世十方の諸佛にすてられたる悪人女人をすくひましますは、たゞ阿彌陀如來ばかりなり。これをたふとき事ともおもはずして、朝夕は悪業煩惱にのみまとはれて、一すぢに彌陀をたのむ心のなきは、あさましき事にはあらずや。ふかくつゝしむべし。あなかしこく。

西蓮寺本二ノ三、本誓寺本二ノ一四、了西寺本七、名塩本四ノ八四、坊本七一、全集一七三。

吉藤専光寺 門徒中面々 安心之次第 大略 推量せしむるに、念佛だに申て、毎月道場寄合にをいて懈怠なくば、往生すべきなんとばかり存知候歟。但、それは今少不足に覺へ候。

抑當流聖人之さだめをかるゝところの一義はいかんといふに、十惡五逆の罪人 五障三從の女人たらん身は、たゞなにのわづらひもなく、一心一向に彌陀如來を餘念もなくふかくたのみたてまつりて、後生たすけたまへと申さん輩は、十人は十人ながら百人は百人ながら、ことごとくみな報土に往生すべきこと、さらくうたがひあるべからざるものなり。これすなはち他力眞實の安心決定の行者といつべし。かくのごとくこゝろえたる人をなづけて、一念發起平生業成の當流念佛の行人と號するものなり。この外には、ことなる信心とても別の義ゆめあるべからず、とよくこゝろうべきものなり。あなかしこく。

専光寺藏眞本、名塩本四ノ八七、坊本八一、全集一七四。眞本に文龜元年六月十七日附實如の證明奥書あり。

抑當所富田庄内の男女老少（みな）ともに、安心のおもむきをこゝろうべきやうは、まづ一切の諸佛も一切の諸神もこゝろをひとつにしてみなともに、衆生の地獄にをちんことをなげきかなし

みたまひて。もろくの佛たち^{菩薩}御身を變じて三熱の苦をうけて、神と(は)あらはれま
 しくて、衆生に縁をむすびて、なにとしても佛道にひきいれしめんとおぼしめして、
 一切の神とはあらはれたまふものなり。このいはれをつねに和光同塵は結縁のはじ
 め八相成道は利物のをはり、といへるはこのころなり。それ 和光同塵といふは、
 一切の諸佛の神とあらはれて、衆生に縁をむすびて、このちからをもて結縁のはじめ
 としたまふころなり。八相成道は利物のをはりといふは、つゝにこれを結縁のは
 じめとして佛道にひきいれんとしたまふころなり。これもいまたづちに佛に
 なることにはなきなり、ひさしき縁となる(こと)なり。かやうに神につかへて、
 ながく輪廻せんよりは、いま彌陀如來を一心にたのみまひらせて、後生たすけたまへ
 とまふさん衆生をば、みなことごとくたすけたまふべし。^{はんことはうたがひなし}これほどにやすくたすけま
 します彌陀の本願を^{たのま}しらずして、むなしく死せんことは、愚癡のいたり、あさましきこ
 とにはあらずや。このむねをよくくころえて、ふかく彌陀をたのみて、淨土に

(やすく) 往生すべきものなり。あなかしこく。

名塩本四ノ五〇、全集一六〇。名塩本四ノ五一を以て傍記及括弧内を加ふ。

(二侯の勝如へ被參候)
 五しやうを一大事とおぼしめし候はゞ、たゞ一すぢに^(彌陀)みだをたのみまいらせて、もろ
 くの^(雜行)ざうぎやう物のいまはしき心などをふりすて、一しんに^(心)ふたごころなくた
 のみまいらせてこそ、ほとけにはなり候はんずれ。さやうに人に物をまいらせて、そ
 のちからにてなどとうけ給候。なにともなき事にて候。よくく御心^(得)へあるべく
 候。五しやうほどの一大事はあるまじく候。文をよくく御らんじ候べく候。返々
 御心へのとをりどもあさましく候。これよりのちいよくよく御心へわけま
 しく候べく候。

西本願寺藏六日講四講御文寫本二〇、全集一三二。名塩本四ノ七一、坊本七三、全集一六七。勝如は華藏閣

玄眞第三女、本泉寺宣祐室、長祿四年二十三歳にて出家、明應四年六十八歳寂。實悟記(蓮如上人行實考)に

「蓮如上人實如上人仰にも、北陸道の佛法は此尼公の所爲なりと被仰ける。文明の比蓮如上人より中違の事侍りしと也。……何事ぞと云に、本寺へあまりに細々の音信あれば、本泉寺可斷候。本寺を心に被入事無數限、時々折々に物を上せまいらせらるゝとて、蓮如上人御中をたがはれ侍りける。さらば御音信を申すべからずとの佗言を被申、御中を被直侍りしが、蓮如上人仰に、音信すべからずとて中を直ては、後には猶物を上せ音信ありたる人なりと」云云。

その方にみなく、申されさふらふなるは、信心をうるとき、はやほとけになり、さとりをひらきたるよし、うけたまはりおよび候。言語道斷くせ事にて候。それはあさましくこそさふらへ。聖人御一流には定聚滅度とたてましまして、雜行をすて、一心に彌陀に皈したてまつるとき、攝取不捨の利益にあづかり、正定聚のくらゐにさだめたまふ。これを平生業成となづく。さて今生の縁つきていのちおはらんとき、さとりをひらくべきものなり。これをすなはち大涅槃をさるとも、滅度にいたるとも申すなり。かくこゝろうる人を信心決定の人とは申べし、と我々は聽聞申してさふらふ。されば和讃にいはいく、如來すなはち涅槃なり涅槃を佛性となづけたり凡地にしてはさとられず安養にいたりて證すべし、とうけたまはり候。よくくこのむねを御心得あるべく候。あなかしこく。

高田本七ノ四、名塩本四ノ五二下半、坊本三〇下半、全集一六二。本章は名塩本及坊本にては誤りて堅田法住授與の御文(85)と一聯になり居れり。

(名) (御)文くはしく(見)みまいらせ候。それにつきて信心の事うけ給候。十劫正覺の時(我身の)往生さだまるなんどといふ事は、いはれぬ人の申事にて候。これによりてされば、日ごろのわろき心をばうちすて、これよりのちはたゞ一心に、阿彌陀如來後生たすけたまへ、とふかくたのみ申さば、いかなるつみふかき人なりとも、かならず彌陀の御たすけにあづからん事、さらにつゆほどもうたがふ心ひあるべからず。かやうにこゝろえてのちはそうじて南无阿彌陀佛く候とねてもさめ念佛の念佛の心は、かやうにやすくたのむ(一念の)人を御たすけある事の候ありがたさ

よと申す心にて候。これすなはち、當流上たうりう聖人の(すゝめまします)信心決定の人
とはおほせられたる事にて候。このおもむきをこのむねをえよくく。心へくわけられ候べき事か
(肝要)んようにて候。あなかしこく。

六月四日

蓮如御判

とち川尼(公名四)どの御かたへ

なをくこのおもむきをたれくにも物がたり候(名四)あるべく候。

六日講四講御文寫本一九、名塩本四ノ六五、坊本五五、全集一三二。名塩本三ノ三一、坊本六三、全集八八―
によりて傍記括弧内を加ふ。此本には「とち川尼ども」以下の奥附なく、又「明應六年七月四日書之」と年記
あれど、稍、解し難き點あり、姑く疑を存す。栃川尼公は法名如祐、蓮師異母妹、西光寺永存室。文龜二年十
月二日寂、八十歳。

信心のやう(様)たづねうけ給候。なにのわづらひもなく阿彌陀佛を一心にたのみまいら

せて、そのほかは、いづれの佛も神も阿彌陀一佛をたのみまいらするうちにこもりた
る事にて候。とおぼしめして、一心一向に彌陀を信じまいらせたまひ候はんずるが、
すなはち他力の信心をよくこゝろゑたる人にてあるべく候。このほかには、なにのや
うがましき事も候まじく候。むかしは、阿彌陀佛をもたふとくおぼしめして、おろそか
なる御心も候はねども、それは淨華院の御心へどをりにて候ほどに、わろく候。い
まは、阿彌陀佛の御たすけによりて極樂に往生すべし、とおぼしめしただめ候べく候。
もとは、我御申候念佛のちからにて、ほとけにならせ給候はんずるやうに、おぼしめ
して候。それは自力にて、わろきこゝろにて候。いまは、阿彌陀ほとけの御力にて御
たすけありたり、とおぼしめし候べく候。さるほどに、阿彌陀如來の御ちからにて、御た
すけありつる御うれしさをば、念佛を申て報じたてまつるものなり、と御心へ候は
んずるが、すなはち報謝の念佛と申事にて候。彌陀如來の他力本願のことはり、信心
をとると申すも、この事にて候。なにのやうもなき事どもにて候。御心やすくお

ぼしめし候べく候。五障三従の女人十惡五逆の惡人は、この彌陀如來の本願にあらずは、極樂に往生するといふ事あるまじく候。かゝる殊勝の本願にあひまいらせて候事、まことに宿縁のもよほすところとありがたくこそ候へ。よくよくこのとりをまことと御心へ候て、報恩謝徳のために御念佛候べく候。あなかしこく。

願得寺藏實悟所寫本、名塩本四ノ九〇、坊本八二、全集一七六。實悟本奥に云「正本本善寺有之。此御文女房衆へ被參候御文也、誰人の御方へ共不成慥、文章之様鉢御令以正御筆寫之校合畢」。案するに、淨華院云々と文中にあれば、異母妹藤嶋尼公宛とするを可とせん歟。藤嶋尼公は朽川尼公の妹、初め攝受庵見秀禪尼の弟子となり、淨花院流相承。法名見瑞、後に當流に歸して如祐と改む。永正二年寂、七十五歳。

抑年貢代五千疋分慥到來候。不始于今難有こそ候へ。是も佛法志あるによりての儀にて候間、先於此人數いよく信心決定せられ候て、眞實々々往生極樂をとげられ候はゞ、愚老七十餘廻之壽命のび候本望は是にすぐべからず候。此趣能々惣

中へ披露せられ候べく候。あなかしこく。

七月廿八日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一三。

六日講重書事態三坊主中よりのぼせられ候。返々悦入候。委細之儀惣中物がたり候べく候。穴賢々々。

八月十九日

蓮如御判

三坊主中へ御返事

尙々當寺之事こそ候うへ、丹後子供まで配當候事、返々ありがたく覺候。惣中へ能々披露候べく候。

全集一一四。

諸文集

抑毎年五物之事慥請取候。返々ありがたくこそ候へ。就其、人間は老少不定の事にて候間、いかにも早く本願をたのみ、一心に念佛申させ給候べく候。何のやうもなく一向に阿彌陀如來御たすけ候へ、とたのみ申す一念のころにてうたがひなければ、往生は決定せしむる事にて候。更に煩あるまじく候。此分能々心へられ候て、念佛申され候べく候。あなかしこく。

十一月八日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一五。

六日講中 毎年約束無相違請取候。返々難有こそ候へ。就其、信心能々とられ候べく候。もろくの雜行をすて、一心に彌陀をたのみ申さむ人々は、かならず佛の

御心にかなひ候て、みなく極樂に往生うたがひあるべからざるよし、よく物中へ披露、念佛申させ給ひ候べく候。あなかしこく。

十一月廿日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一六。

約束の五物慥に請取候。返々難有こそ覺候へ。就其、安心の次第は、一念に阿彌陀佛をたのみ申候より外は、別の子細もあるまじく、能々信心をとられ候べく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一七。

約束之代物之事 如先々 慥に請取候。返々 難有こそ候へ。就其、安心之事 能々 決定候べく候。一念に彌陀をたのみまいらせ候のちの念佛のころは、阿彌陀佛の我等をやすく御たすけ候。ありがたさの御恩のたふとさうれしさよ、とよろこび申心より、さらに此外には わづらはしき事あるまじく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一八。

(明應六年) 六日講 毎年 約束之分 慥に請取候。返々 難有こそ候へ。就其、老少不定の人間にて候間、早々 信心決定候て、眞實報土の往生 遂られ候べく候。なにの様もなく一心一向に彌陀をたのみまいらせて、たすけ給へと一念信ずる人は、かならず 極樂に往生

すべく候。返々 うたがひあるまじく候べく候。能々 心得られ候べく候。あなかしこく。

十一月廿五日

蓮如御判

六日講中へ

全集一一九、高田本七ノ六、玄興寺本一二、名塩本四ノ五五、坊本四五。高田本以下諸本に「たぐひなき佛智の一念うることは彌陀のひかりのよをしとしる 正月一日おもひいづるまよむ」と附記せるは、恐く本章の扣本に蓮師が備忘として記し置かれたるを共まゝ轉寫したるなるべし。

(明應七年) 抑 毎年 約束代物之事 慥に請取候。此趣 惣中へ 可有披露候。返々 難有候。就其、一念にもろくの雜行の心をふりすて、彌陀如來 後生たすけたまへと申さむ人は、かならず 後生は一定にてあるべく候。其分能々 惣中へ 披露候は、可然候。何事も 後生にすぎたる 一大事は あるまじく候。今生はたゞ 一端の事にて候。よく

諸文集

心へられ候て、往生せられ候はゞ、可然事にて候。あなかしこく。

十一月廿六日

蓮如御判

六日講中へ

全集一二〇、名塩本三ノ五四。名塩本に「明應七年霜月廿六日」の年記あり。

抑自四講爲報恩講志分代物拾參貫文慥請取候。返々難有覺候。此由能々惣中へ可有披露候也。就其相構々々佛法之信可被取候。一念に阿彌陀佛をひしとたのみ、もろくの雑行をすて、後生をたすけ給へ、と無疑心たのまれ候はゞ、かならずく極樂へ往生あるべく候。其分あまねく披露候べく候。若愚老も存命に候はゞ、春は見參共あるべく候。あなかしこく。

十二月廿八日

蓮如御判

四講中

毎度志共返々ありがたく候。殊今度又千疋分返々煩至候。就其能々信心決定候て、報土の往生治定せられ候べく候。人間は老少不定のさかひにて候へば、いそぎく往生決定の信を得られ候べく候。愚老も七十有餘の身にて候へば、且暮を期せずこそ候へ。いかさま命も候はゞ、春は見參に入候べく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

四講中へ

全集一二二、名塩本四ノ五七、坊本四七。

毎年約束錢之事慥に請取候。返々ありがたく覺候。就其安心之事雖不珍候、もろくの雑行をすて、一心に彌陀如來今度の後生たすけ給へと申人々は、みな悉極樂に往生すべき事、疑あるべからず候。其分いくたびも面々談合候て、能々往生

をとげられ候はゞ、可然事にて候。此由惣中へ披露あるべく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

四講中へ

全集一二三、名塩本四ノ六一、坊本五一。

約束代物之事 慥に請取候。返々難有覺候。就其安心之事、一心に彌陀をたのみま
いらせてのうへには、南无阿彌陀佛くと申す念佛の心は、彌陀如來 やすくたすけま
します御恩のありがたさよ、と申す心なりと心得られ候て、朝夕念佛申し給ふ
事かんようにて候。この外には別たる事もあるまじく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

四講中へ

又佛事分 十二慥請取候。

全集一二四、名塩本四ノ六一、坊本五一。

四講 毎年約束之分 慥請取候。千万難有候。就其老少不定之人間に候間、他力信
心能々可有決定候。いかなる罪ふかき身なりとも、彌陀如來を一心一念にたのみ
まいらせん人々をば、かならず御たすけ候べく候。うたがひなく念佛申させ給ふべく
候。此由みなくに申ふられ候べく候。あなかしこく。

霜月廿五日

蓮如御判

四講中へ

全集一二五、名塩本四ノ五九、坊本四九。

毎年之約束物之事 慥請取候。返々難有こそ覺候へ。就其安心事、一念に阿彌陀佛
をたのみ申候よりほかは、別の子細あるまじく候。其上には、朝夕念佛申させ給候

はんずる。肝要にて候。其分講衆中へ披露候べく候。あなかしこく。

十一月廿八日

蓮如御判

四講中へ

全集一二六、名塩本四ノ六三、坊本五三。

今度報恩講中志として千疋慥請取候。返々難有こそ候へ。就其、幾度申候ても同
事にて候。一心に彌陀如來後生御たすけ給候へ。とふかくたのまん人は、十人も百
人もみな浄土に往生あるべく候。初心なる方へもかやうにすゝめられ候べく候。
これよりおくふかき事はあるまじく候。よくくこゝろえられ候べく候。あなかし
こく。

十二月廿八日

蓮如御判

四講中へ

全集一二七、名塩本四ノ六〇、坊本五〇。加賀小松興善寺に四講御文の蓮師眞筆本を藏す。其文言は

「四講中年貢之分五千疋又今月報恩講之志に千疋何も返々志至ありがたくこそ候へ。能々披露
あるべく候。穴賢々々。十一月廿四日 蓮如(花押)」

四講中へ

とありて、法義の文言なし。是は恐く前掲七通よりは前年のものならん。

馬黒月毛二疋のぼせられ候。返々悦入候。乍去煩之至候。就其、人間は老少不定
の界にて候間、世間は一旦の浮生、後生は永生の樂果なれば、今生はひさしくあるべ
き事にもあらず候。後生といふ事は、ながき世まで地獄にをつる事なれば、いか
にもいそぎ後生の一大事を思ひとりて、彌陀の本願をたのみ、他力の信心を決定すべ
し。されば、信心をとるといふも、なにのわづらひもなく、南无と一心に彌陀をたの
めば、阿彌陀佛のやがて御たすけある事なれば、又信心をとるといふ事も、この南
無阿彌陀佛の六字のこゝろなり。このゆへに、一心に彌陀をたのみまひらせて、行住座

臥に念佛を臨終まで退轉なく申べきものなり。あなかしこく。

十月十八日

蓮如御判

四講中へ

全集一二八、名塩本四ノ五六、坊本四六。

抑不寄思 河原講中より綿拾把代物參千疋被上候條、難有こそ候へ。就其、もろくの雑行をすて、一心一向に彌陀をたのまれ候はゞ、極樂の往生は治定にてあるべく候。此由能々惣中へ披露せられ候べく候。あなかしこく。

十一月十九日

蓮如御判

河原講中へ

全集一三〇。

(文明十八年)
山田光闡坊事 江沼郡中として取立られ候間、返々ありがたくこそ候へ。後々までも可憑入候由、惣中へ可有披露候。次佛法の安心の次第も同能々決定候はゞ、末代までもありがたく思べく候。穴賢マ々。

正月廿八日

蓮如御判

江沼郡中へ

全集一二九。以上十八通及188、190の二通合計二十通は西本願寺藏六日講四講御文寫本より『御文全集』に採録せるものによる。六日講御書八通及光闡坊御書は河崎專稱寺案持、四講御書八通は小松淨西安置すあり。同寫本奥書に云「右六日講四講並所々御書如眞筆令模寫訖、先年所奉安置之本今於一帖令撰集處也。件本御早筆之間落字等有之、雖然任貴翰之旨先終書功矣。更不可及不審耳。于時永祿四年十二月十五日記之」。

返々御志難有候。(下野當郷カ) たうに留候て、今泉までも立寄候はず候。京都之事も無子細之由是にて聞候。以前三位公之一結上様へ御寄申候べく候。

誠今度其方までも可立寄存候の處、物念之由奥にて聞候上、はや思留候。思召寄預御狀候、難有候。結句二百疋御志之至爲悅候。内々は老躰事候にて御渡候の間、可見參入候へ共、無力次第候。國も靜候てふと可上洛候。坂東下向事路次之中無子細松島まで令下向候。心安可被思食候。返々國中物念無勿躰候。毎事期上洛之時候。恐々謹言。

八月一日

蓮如花押

越後高田淨興寺藏眞筆本。本消息は蓮師が坂東御巡化中に送られたるものにて、時に淨興寺は信濃長沼にあり。

尙々よき程も候はゞ、以無爲儀兩大工にさせられ候べく候。万事憑入候。

誠昨日は雜談申候の條、千万悦喜申候。仍大工之事、我等も一向其儀を大切に存候之間、大工に口入仕候處、兩大工之分不可叶候由申候間、我等も迷惑候。於是非、たとひ失一命候共、不可承引由申候。一躰も候てせめて兩大工に仰付られ

伊勢專修寺藏眞筆本。表に「專修寺御房御返報」とあり。

七月三日

蓮如御判

候はゞ、猶々叶候はぬまでも申て見候べく候。如仰送日候へ共、御在京大切候間、それのおぼしめしよりも我等はたえず候。委細之儀は使申され候べく候。恐々敬白。

大工之事無爲候之旨、一身大慶此事に候者也。造作させられ候歟、無心元候。大□之事車□指圖させられ候はゞ、一見申度候。相構く、たとひ二三年半作候ておかれ候共、略々申候は、爲當寺それさまの御ため不可然候。御心得之まへにて候へ共、大工にも結構せよと仰付られ候べく候。返々今度は如此次第出來候間、至于今於我等一身迷惑候。乍去無子細候間、自何く、目出度祝着之至候。委細之旨以面談之時可申述候。恐々敬白。

七月十二日

蓮如御判

專修寺眞筆本。本章にも「御返報」と表記あり。

さむくなり候て、早々北國へ御下候べく候。京は事外さむく候て、御かんに
 ありがたく候。又春は早々今夏之やうにくわうけん候べく候。
 此方之儀共先雜説之分にて候。乍去ゆだんなく候。御心に入候て承候。千万悦喜
 申候。次御新發意在京之事、前住之時より約束と申、於我等無余儀事候。但かん
 くゝのしきにて御いたわしく存候。それだにも御かんに候て候べく候。先目出
 候。明日より御入候へと承候。心得申候。又戸びら出來候べき由承候。目出候。
 諸事期面謁候。恐々敬白。

七月廿七日

蓮如御判

專修寺眞筆本。御新發意とあるは誰か知らず、應眞は延徳三年の誕生と見ゆ。以上三通は專修寺文書(山田
 文昭氏影寫)に收めたる五通の内なり。不明の箇處あるも、高田眞慧師より大工の事を依頼せられたる往復

文書と覺ぼしく、その年月は康正三年六月存如示寂より寛正六年正月大谷破却までの間なり。

讓與 大谷本願寺御影堂御留守職事

右件住持職者、去文正之比俄光助律師江申付、既讓狀與之訖。雖去、其身無競
 望由申間、重而光養丸仁所讓與實正也。但就法流無沙汰之子細在之者、於兄
 弟中守其器用可住持者也。次、兄弟爲大勢之間、無等閑可有扶持者也。若此
 條々相背其旨者、永可爲不孝者也。仍讓狀如件。

應仁二年戊子三月廿八日

蓮如(花押)

西本願寺藏眞筆本。光養丸は實如上人の幼名なり。文正之比は祖影を奉じて江州安養寺にありし時にして
 應仁二年二月堅田より大津道覺の新造に移らる。

讓與 大谷本願寺御影堂御留守職事

右件御留守職者、任代々例、早可管領者也。但、就法義非儀之子細在之者、於兄弟中、守器用可住持者也。次、男女少兒之兄弟多之、愚老如存生之時、不相替可扶持者也。若相背此等之旨、永可爲不孝者也。仍讓狀如件。

延徳貳年十月廿八日

兼壽 (花押)

西本願寺藏眞筆本。是も實如上人に對する讓狀なり。實際の退隱は前年八月廿八日なり。

傳へ聞く、人の名の字は主によるといへる事のありぬらん。夫慶恩房とかきては、恩を悦ぶとよめる歟。しかれば、此恩といふは、抑なにの恩ならん。凡そ勸へみるに、此仁は本は聖道門の人なれども、近比はたゞ弓箭にのみたづさはりて、更に其聖道において佛法修行の心はあらざりき。依之、不思議の宿縁のもよほしによりける歟。當山に來至せしむる間、何となく一流安心のおもむき耳にとゞむる、其恩を悦ともいひつべき歟。又京都は本來本所たるがゆへに、こゝにてうる所の信心は、みなも

と京都聖人の御恩なるがゆへに、とほく京都の御恩を悦ぶ道理にもかなふべき歟。何様にも兩様につけて可然勸へなれば、(行カ)旁以殊勝の坊號たるものなり。

法名 釋蓮慶

慶恩房 實名光善

文明四季 極月廿八日

釋蓮如 (花押)

加賀小松本光寺藏眞筆本。

於諸門下 企惡行之由其聞在之、言語道斷之次第也。所詮向後於如此之致張行之輩者、永可放聖人之御門徒。此趣堅可有成敗者也。謹言。

七月四日

蓮如 御判

專光寺江

加賀專光寺藏眞筆本。成敗之御書と稱し、富樫氏と鬭諍のとき之を發せられて諍論を中止したり、と言ひ傳ふ。能登七尾光徳寺にも同日同文の御書を藏し、宛名は「光徳寺門徒中」とあり、本文中「御門徒」が「御門徒

中」とある丈の相違なり。蓋し同時に數通を作られしものならん。

扇一本女中へまいらせ候。

祝言之事納了。抑百疋色々重寶祝着候。天下事無煩無爲候。可被心安候。門徒免許之事惡行之輩可選之候。可被心得候。相搆々々人々大勢ざわめき上洛不可然之由。可被申候。免許之上は當年中無上洛候共不可苦候。其分可有披露者也。恐々謹言

二月廿日

蓮如御判

光闡坊御返事

越中光徳寺藏眞本。闡の字或は國と讀むべき歟。

又 [] のほかに [] にてその御煩のみにこそ候へ。

吉崎事留守之儀。於于今無等閑事候間。悉皆その可爲計候間。心安覺候。佛法不思議之事候間。さのみ煩もあるまじく候。乍去老牀の事候間。御身勞推量申候。愚老も事外老屈候間。迷惑こそ候へ。每事期後信候。恐々謹言。

五月十日

蓮如(花押)

本覺寺御房

能登七尾常福寺藏眞筆本。和田本覺寺蓮光に送られたるものならん。

雖比興候。折節持合候間。をりいろ進候。猶々草坊被取立候。禮物として五百疋請取。返々御煩之至候へ。

抑爲報恩講。鵝眼二百疋。慥請取候。隨而色々重寶之桑染小袖。爲褥絹同綿壹把。千萬々懇志至難有覺候。殊毎年以其褥冬内令養性事 [] 誠志至難忘候。又於吉崎草坊被取立由申候。是又目出候。年内無餘日期來春可申候也。恐々謹言。

十一月十八日

本覺寺ご返事

蓮如(花押)

抑於毎年態々御音信返々悦入候。爲報恩講百疋絹壹疋綿壹把慥に請取候。御志至千万々難有覺候。次松岡之事、蓮光遺言候とて、和田に造新建をかれ候事、無是非ありがたくこそ候へ。如此念比に、心中たくまれ、いとゞ悦喜候はんずらん。と思出候ばかりにて候。門徒中へも、松岡かやうに□わしをかれ候事、能々披露ある(へくか)候やうにも、此子細可申候の處に、松岡いまだ下向候はぬまへに、隱密此分にて候間、是非を(不申候カ)返々ありがたく候よし、能々披露候べく候。恐々謹言。

十一月廿八日

蓮如(花押)

本覺寺ご返事

以上二通越前福井本覺寺藏眞筆本。蓮光の子蓮惠宛ならん歟。松岡とあるは松岡寺蓮綱なり。

眞偽未定の分

(1)

もろくの雜行雜修のころをふりすて、一心に阿彌陀如來今度の我等が一大事の後生御たすけ候へ、と一念にしかと頼み申して候。たのみ申したる一念のときは、はや我往生は一定と存じ、阿彌陀如來の御恩ありがたく念佛申し候。箇様の往生の御ことはりまざれもなく、聽聞申しわけまひらすること、是偏に御開山聖人御出世の御恩、次第御相承、只今の眞の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、いよく難有存じ候。御本寺より被仰出御掟の通、命をかぎり、以御慈悲隨分たしなみ申し候。

改悔文の類文多し。上掲は『信受本願義』に惠明院如晴の『科鈔』に出づとて掲ぐるものなり。如晴所傳として攝州順正寺に藏する寫本には傍線にて示す如く文言不足す。然るに『科鈔』所掲のものはまた左の如く少異あり。

諸の雜行雜修、自力のころを捨て、一心に阿彌陀如來今度我等が一大事の、後生御助候へ、と一念にしかと頼み申て候。頼申す一念の時、我往生は一定と存、佛恩報謝

の稱名念佛を申候。箇様御理り無紛聽聞申分まひらする事。是偏御開山聖人様の御出世の御恩、次弟御相承唯今の眞の善知識様の不淺御勸化の御恩與^(ト)愈難有喜申候。猶御本寺様より被仰御掟通命を限に以御慈悲隨分嗜可申と存候。

丈愚の『改悔私記』^{萬治二}年刊に掲ぐるもの左の如し。

諸の雜行雜修自力の心を捨て、一心に阿彌陀如來今度の我等が一大事の後生御助候へと奉頼候。頼一念の時、如來の御助一定我が往生治定と存じて、報謝の爲に念佛申候。加様の心に被成候も、宿善の催とは申ながら、偏に御開山聖人の御出世の御恩、次弟御相承眞の善知識の不淺御勸化の御慈悲の極にて候。此上には、仰出し在々す御掟を、隨分命を涯りに嗜可申と云。南无阿彌陀佛々々。

河内出口光善寺藏蓮師眞筆本と稱せらるるもの左の如し。

もろくの雜行雜修自力のころをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへ、とたのみまうしてさふらふ。たのむ一念のとき、往生一定御たすけ治定とぞんじ、このうへの稱名は御恩報謝とよろこびまうし候。この御ことはり聽聞まうしわけさふらふこと、御開山聖人御出世の御恩、次弟相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたくぞんじ候。このうへは、さだめをかせらる、御をきて一期をかぎりまもりまうすべく候。

『和語眞宗法彙』には校異して、甲斐萬福寺傳本には「御助候へ南无阿彌陀佛と頼み申して候」とありといへり。西本願寺法如上人證判本には「報謝とぞんじよろこびまうし」とあり。又越中西念寺傳來の古寫本に左の一文あり。

「畏て申上候ふ。」

抑々我等が心へおき候分は、もろくの雜行雜修の心をふりすて、一向一心にふたごころなく彌陀一佛をたのみたてまつり候ひて、我等ごときの罪惡生死の凡夫をたすけますことのあるがたさのあまりに、佛恩報謝のために、行住座臥に稱名せしめ候。さ候時は、我等が往生は佛の御はからひと心得おき候。さりながら、願力不思議の道理を聽聞申候は、しかしながら善知識の御恩と心得まひらせ候。もしこのやうあしくも候はんや。

抑蓮乘とりづきによりて各々の安心のおもむきこころる候ひき。この安心のやうしかるべく候。此分を面々に申され候べく候ふ。

文明三年十二月一日

御在判

此寫本には此文に繼いで聖教拔書の「善導云」の文(一)及曠劫多生の文(二)を寫し、終に別筆にて「此蓮如上人御法(語)は昔年より當寺に雖有之、惡筆故龜相にして予も尊敬せず、然るに七旬の頃より氣付き今八旬に及び甘心し奉るに、當流に御講或は法事の初夜ことに報恩講に申上げたてまつる改悔は、蓮如上人より始めると申し傳へ侍べるは、即ち此文明三年十一月一日こそその根元なるべし、と云ことしかり、可仰可信。日野西念寺再進院釋誓願八十歳記之」と奥書あり。蓮乘は蓮師の第二子にして、夙に瑞泉寺宣祐の猶子となりて北國にあり。

世間に人の物忌する事

夫世間のならひ、今生の身命をおもくして、富貴榮花のみ心にねがはしきまゝに、正月にはことによしなきそらごとどもとりあつめて、今生のいはひ事をのみしあへり。

去年去々年もいはひしかども、まさりがほなきにこりずして、年ごとに祝ひあへり。さるほどに、死といふ事ををそろしくいまはしきゆへに、文字のこえのかよへるばかりにて、四ある物をいみて、酒をのむにも三度五度のみ、もろくの物のかずも四をいまはしく思なしたり。それほどに四の文字の音だにもいまはしき心に、正月はことにをそるべき死せる魚鳥を家のうちにとりいれて、きりもりいりやくは、たゞ人畜ことなれども、死のかたちおなじければ、葬送のかたちなるべし。されば經にいはく、肉を食する口には屍をすつる塚なり、と云へり。などか是をいまざるべき。精進潔齋し戒をたもち佛につかへんこそ、壽命福德も目出かくべし。正月には尤これを行ずべし。世間の人の物祝返々道理なく思侍べり。又ほしからぬ物をば、死人の具足なりとていとひ、大切なる所領財寶をば、死人のあとなれどもこれを取らんと論じ、貧人をいむも氣色わるきものをばひさしくいみ、きる物などはさしもいまぬ事なり。かくのみ顛倒の心にて、世間のあさき道理をだにしらぬ、ふか

き佛法の義理まことにさとりがたし。をろかなる凡夫のならひかな。本覺佛法内にあり。世間出世の道理知識の縁にあふて是を覺知しさとりしり、常に常住の妙道に歸して顛倒の邪執をすつべきものなり。

本善寺藏實從寫本、淨願寺本六九、西光寺本二五。本善寺本に奥書あり、「御筆のうつしをもて寫畢、不審の所をば如本うつす也」。また「飯貝にて實孝如此遊候をうつす者也。永祿三年十月十五日實從」。御筆とは蓮師を指す歟、暫く疑を存す。

[3]

抑一切の女人たらん身は、なにのやうもなくたゞこゝろをひとつにして、もろくの雜行といふことをうちすて、彌陀如來の本願と申すは、われらごときの五障三從の女人を本とたすけん、といふ願をおこしますほとけなり、と信じまいらせて、このたびの後生たすけたまへ、とひしとたのみまいらせん女人は、かならず極樂に往生すべきこと、さらしくうたがひつゆちりほどもあるべからざるなり。かやうにこゝろえたらん女人は、ねてもさめても、阿彌陀如來のなにのわづらひもなくやすく御たす

けにあづかることありがたさ御うれしさを、おもひまひらせて、つねに一期は念佛申すべきばかりなり。あなかしこく。

淨願寺寺二五。

[4]

五濁惡世の有情の選擇本願信すれば不可稱不可説不可思議の功德は行者の身にみたり。この和讃のこゝろは、この世のわれら衆生の阿彌陀佛を一心にたのみまいらせて、後生御たすけさふらへとまうさん有情には、不可稱不可説不可思議とて殊勝なる大功德を阿彌陀佛のわれらにあたへましますがゆへに、无始よりこのかたの惡業煩惱みなこ(二本)とくくきへはて、无上涅槃のくらひにいたるべきものなり、(とこゝろうべし)。あなかしこく。

次郎右衛門本。

(5)

如來大悲の恩徳は身を粉粉にしにしても報ずべし師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべし、といへり。されば、身を粉にしくだきほねをくだくほどの志こそなくとも、聖人の御出世によりて一定生死をはなるべきことのかたじけなさよとおもはゞ、など一日に一度づゝの勤行にもいで、佛恩師恩の志なからん。かやうの心中のなき人は、他力佛智の不思議しみくりとなきあひだ、たふとさのすくなきまり、かやうに佛恩おほやふなるものなる間あひ、かまへてく昨日まではこりへちがふとも、今日今時より老少ともに心中をひるがへして、大悲弘誓の御恩をのふかきことをのみおもひて、稱名念佛すべきものなり。あなかしこく。

(六十三歳)

淨願寺本四六、西光寺本。能登眞證寺本を以て傍記等を加ふ。

(6)

至心信樂欲生我國といふ事

至心信樂といふは、至心は眞實とまふすなり。眞實とまふすは、煩惱具足の衆生はもとより眞實の心なし清淨の心なし、濁惡邪見のゆへなり。信樂といふは、如來の本願眞實にましますを、ふたごりなくふかく信じてうたがはざれば、信樂とまふすなり。至心信樂は、すなはち十方の衆生をしてわが眞實なる誓願を信ずべし、とす、めたまへる、御ちかひの至心信樂なり。凡夫自力のこりにはあらず。欲生我國といふは、他力の至心信樂の心をもて安樂淨土に生まれんとおもへとなり。安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさるとも滅度にいたるともまふすは、御名こそかはりたるやうなれども、これはみな法身とまふす佛となるなり。法身とまふす佛をさとりひらくべき正因に、彌陀佛の御ちかひを法藏菩薩われらに廻向したまへるを、往相廻向と申すなり。この廻向せさせたまへる願を念佛往生の願とはまふすなり。この念佛往生の願を一向に信じてふたごりのなきを、一向專修とまふすなり。如來二種の廻向とまふすことは眞實信心とまふす。この眞實信心のおこるこ

とは、釋迦彌陀二尊の御はからひよりおこりたり。としらせたまふべく候。あなかしこ

く。
圓覺寺本、安福寺本。本章は銘文及び末燈鈔の文より成る。或は聖教拔書の一部か。

そもく、當流に沙汰するところの信心といふ二字をば、まことのころとよむなり。また安心とかきては、やすきころとよむなり。これによりて不審あり。信心の二字をば、まことのころとよむは、彌陀如來の他力のまことの御ころときこえたり。また安心といふ二字をやすきころとよめるは、さらにそのいはれきこえはんべらず。如來の他力の御ころなれば、大事のころとこそよむべきに、やすきころとよむは不審におぼへはんべり。

こたへていはく、まことにこの不審は道理至極ときこえたり。まづ无善造惡のわれらが、一念にもろくの雜行をすて、一心一向に彌陀如來にふたごころなく歸命す

る衆生が、如來の佛心(たゝ)となりき、やすくたすけすくひたまふことは不思議なり。これをおもふときは、佛の御ころはまことのころなり。无善の衆生がなにのやうもなく一心にうたがひなくたのめば、かならずやすくたすけたまふころなれば、安心とはやすきころとよめるは、まことに道理にかなへりときこえたり。念々彌陀如來のまことのころのとりやすの安心や、といへるころなり。あなかしこく。

名塩本四ノ九六、全集一七八。

靜おもんみれば、此比は當山之内にも其外往來の諸人等を見及ぶに、凡後生には心を入たる風情なり。しかれども、誠にとりつめこは其意不同なる様にみえたり。されば、このたび安心のとをりもし眞實に決定せずは、極樂往生は不定なり。一大事これにすぐべからず、よくく思慮すべし。されば上古の賢哲も往生の一道にはまどへる子細あり、いはんや末代の我等において(以下缺損)

昔筑紫方之事にてもありける歟。小里の一村ありつる所に道場をかまへ、念佛の宗をたてたりしかば、其あたりの人民おほくあつまりて此法を修行しける程に、彌陀如來之他力本願之一すぢにたふとき事をのみ沙汰しあそび侍けり。さる程に、此人數に加る輩どものおもふ様は、此法にまさりてたふとき事なしとて、ことには又在家止住の類に、おいては、後生のたすかるべき法はこれより外には更にあるべからずと信じて、朝夕はあつまりて、信仰の志のふかきによりて、結句諸宗をば謗人と名て、佛法信ずる人とも中々おもはざるがゆへに、此人數のふるまひども以外人目に立て、わるくみゆる事かぎりなし。然間、諸山寺山伏陰陽等に至までも、これをそしりにくまぬ人はなし。この謂れによりて諸宗一同に談合して、この宗をいかにもして此在所をはらひうしなはん、といふはかり事をたくみけり。依、如此の張

行ある由を、又彼宗の人に、つげしらせければ、以外腹立していふやうは、无下にさ様にせらるまじきものをとて、城廓をかまへ、ほりをほり、やぐらをあげ、兵糧米をいれ、なんとして、敵を相待ければ、一方よりもせめやぶらんとせし所を、散々にふせぎたゝかひければ、敵にはおほく人そこばくうたれにけり。猶もこのまゝうちすて、おくべからずと云て、又諸方の人勢をあまた相かたらひてせめけれども、更に城の内に手おゐなんどもなく、よせ手ばかり損じければ、迷惑なりし所に、其在所には二本六七里ばかりある所より、彼城内によき知人のありけるが、仲人となりて申様、彼弓矢の爲、躰言語道斷不可然次第也。其いはれをいかんといふに、城内はよはる儀はなけれども、不勢に多勢が大まさるべき道理にてもなし。これは无益の事なり。既に彼面々は後生大事の爲に、此一法を興行すといへども、あまりに悪行をいたし、諸宗をないがしろにするによりて、諸宗より如此の退治を加るなり。凡此宗義の輩どものふるまひ天下にかくれなし。たとひ念佛宗をたつといふとも、更に人にかゝるべき義

にもあらざるを、此宗の人ども我が宗の其色を他宗にみする事、以外のあやまりなり。弓矢の仲人をこそ申候はんずれ、加様佛法のおもむきはくはしくは存知候はねども、大概佛法に相違候分をかたり申すべし。よくよく耳をすまして聽聞あるべし。先此面々の佛法方之心得之躰は、佛法者とはみゆべからずと勸化して、至極そのうらをはたらくなり。されば、和讃正信偈ばかりが肝要ぞと云て、かりそめにも本書選擇集等などをよむ人をば、文沙汰と號してこれを偏執し、又淨土三部經などをかりそめにも道場におきたる人をばそしりて、たゞかな聖教をつゞりよみにかた事まじりによむ人をもて本とし、おかしきことばをつかふをもて、これをきゝならひてこれをもて學問とす。されば、いまにいたるまでも隨分に佛法の物語りをする人をきくに、ことばのうちにおいて理にもあたらぬおかしきことばどもこれおほし。又念數をもつは名聞なりとて、一人にても念數もつひとなし。今もやうく勤行の時ならではかりそめにも念數もつ人なし。このころは、はや廻心してよくなりたる人といふべしや。又おやの月日命なればとてあながちに一遍の念佛も申さず、又佛恩の不可思議なることをも思はず、たゞ師匠の報謝の志ばかりなり。これはよき安心とは云がたし。佛恩の深き事を思ひてこそ、又師匠の恩の方をも思ふべきに、恩の方を无下にすて、たゞ師匠の恩が雨山の恩と云事は、佛法の主旨にそむけり。返々已前心得ども以外に相違候間、自今以後は心中をもちなをされ候べし。諸宗を謗人といふべしと云事をば、いかなる人の申出候ぞ。されば、いづれの國いづれの所にも宗々同じくみなある事なれども、我宗の外には後生のたすかるべき宗あるべからずといひて、諸宗を謗人といへる事、以外のあやまりなり。されば彌陀如来の本願にはあひそむけり。既に十八願には唯除五逆誹謗正法ときらひ、龍樹の智論には自法愛染故毀訾他人法雖持戒行人不脫地獄苦とかたくいましめられたり。依之、是非ともに弓矢をとることしかるべからずと教訓するによりて、城内に大将ときこえし人まづ退散しければ、其まゝ弓矢もなくして東西の勢どもひきしりぞきけり。

かくて其跡に炎をかけて炭になしけり。その里にありし人ども散々になりはてにけり。さてあるべきことならねばとて、わびごとをなして、三年ばかりすぎてみなく、本地に還住しけり。依之、末代までもかくのごときの一宗をたて、わろきふるまひをせん人は、いくたびもかゝる難にあふべきものなり。よくくつゝしむべし。しかれども、いまだその執心の者もあるやらん、わろき心中をひちさげたる、たぐひもこれあり、とつたへきく間、勿躰なくあさましきものなり。

名塩本四ノ九七、丁九本、全集一七九。

浄土の法門念佛の一行をこゝろうるに、五重あり。この五重をはこばずして法門のぶれば、衆生をあやまつなり。その五重といふは、一には宿善なり、無宿善のものは浄土教にあはず。二には遇善知識なり、こゝろは宿善のひとはかならず善知識にあふて法をきく。三には光明に攝取せらる。善知識にあふて本願のおこりをきくと

き、彌陀如來もとより无碍光佛とあらはれたまふゆへに、行者の心想のうちに影現したまふなり。このとき无始已來輪轉妄業の重罪、攝取の心光に照護せられて、轉じて功德となり、すなはち往生の大益を證得するなり。四には信心獲得す。さきの光明智相に行者の心身を攝取せらる、ゆへに、はからざるに信心を生ず。これさらに行者の信にあらず。五にはさきの信心より催促せられて、うちに名號をとなふ。これまたかつて行者の行にあらず。佛の无碍智より信心を生じ、信より名號を生ぜしむ。この信心と名號とは、佛恩報謝のために佛智よりもよは(脱カ)され、たてまつりて行ずるなり。この念佛をもて往生のためとはおもふべからず。そのゆへに、三重の光明にてらされたてまつるとき、佛智は攝して凡心にいり、凡心はさつて佛心に歸す。佛智難思の光明の皈托したまふとき、往生の大益を證得しぬるうへには、みづからも信じ人をおしへても信ぜしむるも、信行ともに佛恩報謝のつとめなり。龍樹の偈にいはく、恩をすることはこれ大悲のもとなり、恩をしらざるは畜生となづく、とのたまへり。また外典の

ことばにも、恩をえて恩を報ぜざるは、いきて横死にあひ死して地獄におつ、といへり。彌陀如來の三祇百劫の薰修、五劫思惟の恩徳、釋迦如來五百塵點劫よりこのかた往來娑婆八千遍の重恩、十方諸佛の舌根を三千大千世界におほひましくて證誠護念しますます御恩、かれといひこれといひ、連劫累劫をへても報じつくしがたき重恩をかうふりて、いま宿善にもよほされて、善知識にあふてこのことはりをきき、知識にあふとき攝取の光益におさめとられたてまつりて、光明智相より名號をもよほされたてまつりて、釋迦彌陀十方諸佛の恩徳を報謝したてまつる、とこゝろうべし。名號をとなへて往生のためとおもむくべからず。しかれば、往生は如來の攝取にまかせ、名號をば佛恩報謝にそなふべし。この信行はかつて行者の信にあらず、行者の行にあらず、无碍光佛の大信大行なり。この信行をうれば、生死即ち涅槃なり、煩惱すなはち菩提なり。生死即涅槃煩惱即菩提のいわれをこの土にしてわれとさとらんとはげむを、聖道門といふ、權者修行の法門なり。佛智歸托によりて信行をうれば、かの土に

いたりて大涅槃のさとりをひらく、これを他力といふなり。あなかしこく。

丁九本。

(11)

そもく人の後世とふらふにとりて、まづ中有のあひだ善惡の生處さだまらざるさきに、よく功德を修して、惡道にをとさず善處に生ぜしめん、と廻向する時分あり。その生處さだまりぬる後も、惡趣ならば善處にも生ぜしめ、善趣なりとも三界のうちをはなれて、極樂に生じ佛果を證せしめんがために、これをとふらふべきものなり。中有といふは十王の裁斷なり。をよす人の死せる宿には閻王もつかひをつかはして、娑婆にいかなる追善をか修すると檢知し、亡者も肝をくだきて、遺跡にいかなる善根をかいとなむとこれを徯望す。もしこれを修せず、これをかなしみてうれへをそへなげきをますなり。あとにとまらる人いかでか佛事を修せざらんや。さればこゝろざしの厚薄により修善の淺深にこたへて、十王のうち一王二王の裁斷にあふて、

出離するものもあるべし。乃至一週忌第三年の斷罪をかうふりて、得脱する人もあるべきなり。第三年また十王にあひぬる後も、あるひは十三年あるひは三十三年なんどまでも、その追善をいたすことは、聖教の中にあきらかなる説議なしといへども、我朝の風俗として人これを修しきたれる、せめてもその恩を報じ、いくたびもその生處を甲とうらはんがためなり。これまたいまの生緣未合合中有恒存といふ義ならば、時節をさざるうへは、もとも道理にかなへり。なかんづく死亡の日にとりて、一年に一度の正忌を忌月といふ。一月に一度の忌辰をば月忌といふ。月忌なをもて等閑あるべからず、いはんや忌月をや。されば、年を経といふとも、かの忌月をむかへては、世間の万事をさしおきてかならず菩提をかざるべきものなり。かの死する日あるひは月忌となづけて、忌と稱するなり。忌といふ文字の訓をばいむとよむなり。これ則ち、その忌月においてかの徳を謝するより外に、他事をわすれて禁斷するなり。外典の書に禮記といふ文にこの義をあかせり。又内典には梵網經

に、もしは父母兄弟死亡の日は、法師を請して追善を修すべき旨をとけり。二親ならびに兄弟等の忌月には、諸事をなげすて、佛事報恩をいとなむべき事、内外の兩典にすゝむるところ一同なり。その追善にをひて、かの亡者今生に惡業もふかく、修したる善因もなくして、流轉の報をうけんことはうたがひなければ、それがためにはいそぎて善を修してともに功德を行じて、追善をいたすべし。追善の分齊に仍て善惡の生處さだまるべきがゆへなり。然るに、念佛の行者は信心をうる時、四流を超斷し、穢身をすつる時、まさしく法性の常樂を證すれば、十王の前にいたるべきにあらず。地獄をつる人淨土に往生する人中有のくらゐをゑざれば、かたのごとく往生のためには、あながちに善根を修せずといふとも、不足あるべからずといへども、自身の行業のうへに他力の功用をくはへば、極樂に生ずる人もなをその位もすゝみ、いよく衆生化度のちかひも自在ならんこと、うたがひなし。そのうへ恩を受けて恩を報ぜざれば、わが冥加もなく、徳を荷て徳を謝せざれば、その徳かへりてあたとも

なるなり。かるがゆへに、眞實念佛の行者なりとも報恩のつとめおろそかにすることあるまじきことなり。あなかしこく。

淨願寺本七三、西光寺本二九、實悟記拾遺下卷。

そもく、此吉崎の一字にして彼岸會と申す事は、春秋の兩時において天正時正と申して、晝夜の長短なくして、暑からず寒からず、其日(一本ナシ)いで、正等にして直に西に没し、人民の往還たやすく、佛法修行のよき節すずなるによりて、其かみ佛在世より末代の今にいたりて、これを行ふ也。此時は人の心ゆたかなるによりて、信行増上し易し。されば、冬は秋の餘り夏は春のすへなれば、夏冬は艱苦にして信心修行もをろそかなりやすきに、この兩時の初めこそ信行相續して、未安心の人は宿善の花も開け、信心開發の人は佛果圓滿のさとりをもうるにより、都て佛法信仰の人は參詣の足手を運び法會に出座するものなり。しかれば、彼岸會といへることは、七日の内中日は、日輪

西方にかたぶきかの淨土の東門に入りたまふ。此ゆへに、无爲涅槃の極樂を彼岸とはいへり。今娑婆を此岸といひて、生死海有爲の迷のきしなるにより、佛願正智の弘誓の舟に乗り、さとりのかのきしに至りうるの念佛なれば、經には一切善本皆度彼岸と説し、又は究竟一乘至于彼岸ともたまへり。故に當流祖師聖人の御法流には、まづ平生業成の御勸化入正定聚の益あれば、あながちに此兩時にはかぎらず、つねに佛恩を信知するといへども、未安心の人は、たゞ名聞人目ばかりの心にして法座にのぞみたまはゞ、信心も等閑なるべし。法理も白地にならずして、たとへば珠を淵になぐるが如く、又はうへきの根なきに似たり。これねがはくは、皆々名聞人目の心をすて、信心報謝の念をはこぶべきなり。その肝要と申すは、彌陀如來をたのみ、今度の我等が一大事の後生たすけたまへと一筋に信じ、雜行雜修をはなれたる一心專念の人は、十人も百人ものこらず、極樂に往生すべきことをたふとみ、その嬉さにはねてもさめても南无阿彌陀佛を申して、足手をはこび信心相續あらば、ひとへに信

行兩益の人と云べし。これすなはち十即十生百即百生の人数たるべきものなり。
これぞまことに彼岸會參詣といふべきものなり(一本)。あなかしこく。

右於吉崎 一字 令建立 執行彼岸會者也。

文明五年八月十四日

蓮如 五十九歲 判

若州光久寺本、京著屋所持本、全集一五。

夫人間の生を受たることは別のゆへに非ず、佛法をききて生死を離るべきためなり。このゆへに、胎内にあるうちには、われむまれなば佛道を行ずべし、と思ふといへども、生るゝときの苦みのはげしきに、その心を忘るゝとかや。是故に、一生空く送りすつることあさましきことなるべし。この生に於て貧なるは、布施の行とて今更に神に祈り佛に申たらば、富貴にもならんこと、思は、耻しきことぞかし。つみのもとは欲心なり、災の根は飽き足らぬよりおこれるなり。經の中にも、欲に近き

ぬれば、罪としてつくらずと云ことなきが故に、死して苦としてうけずと云ことなし、といへり。物に足ぬすることなきより、身も苦しく心も惱めり。されば遊禽とて諸のとりどもは、食に足ぬすれば、とびかけりあそぶ、またたくはゆることなし。人もこれにならへとなり。銅を鏡として、わが面のよしあしをみる。人を鏡として、わが誤れるを知る。古の鏡^(をカ)としては、そのすたるゝとすたれざるとのことをしるとかや。念佛の行者は同行を鏡とすべきことなり。さればとて、形ちに嗜みて心のなをらざらんは本意なし。それは名聞につかはるゝと云者なり。人ごとにこゝろのうちにも身のわざにも、常に好みてすてがたくわすれがたきことある、これを人のくせとは云也。無始より已來仕なれたることは、人の教をもまたず、心におもはれせらるゝをば、習氣とはいふ。たとへば、鼠は猫のこゑにおそれ、雉はまた鷹の鈴に恐るゝ、皆是その業より思はれせらるゝことなり。人ごとにわが好むことには、とがを忘れあやまちを忘れて、むなしくこのむ。わが嫌ふ方をば、よきことをも

兎角云ひなして、うちすすつるぞかし。物なきとて善根を營まぬは、物のなきにはあらず。志のなきなり。わがなさんと思ふことには、一衣をうりてもつとむるぞかし。佛は金銀多き善根を喜びたまふにも非ず。たゞ行者の志の深きをうけたまふゆへに、たとへば一紙半錢もしは華一枝も、眞實なれば大善根功德となるべし。そなたの内心はいかにといへば、たゞなにはのよしあしはしらず、一向一心に彌陀をたのみて、報謝の念佛唱るばかりなりといふ。うちきく所は、安心もおちつきたるやうなれども、とかく人に云ひ妨げられては、言ばには似ずとりみだして、つながぬふねの波にたゞよふ風情なるなり。飛鳥川はきのふの淵の今日は瀬となる人の心にたとへたれども、今の信心は凡心にあらず。佛心はみだるゝことなければ、この人のむねのうち、もとより信心のおちつかぬ(マ、)からぬ(マ、)なくは、亂るゝなるべし。千佛光を放ちて説くとも、心にたがはずは、他力信心のすがたなり。さてこそ金剛堅固の信心とはなづけられたり。このゆへに開山聖人のたまはく、往生の心に疑なくなりて候は、攝取せ

られたるゆへとおぼへて候。攝取の上はともかくも行者のはからひあるべからずと云ふ。心より心につかはれて心みだるゝなり。群る雀の鳴子を羽風にうちならして、おのれとおそるゝがごとくなり。

私云 此一通は吉崎退出の時残置たまふ消息なり。

安福寺先啓本。

そもく後生の一大事を幾度もく聴聞候ひて、御勸化のごとく正路に信心御取あるべく候。仍て、もろくの雜行をすて、阿彌陀佛後生御たすけ候へ、と一度たのみたてまつりて候うへには、一期の御嗜にはたゞ念佛申ばかりにて、信心歡喜あるべく候。この念佛を申すこと、つねに報謝と御心得肝要に候。まことに阿彌陀如来五劫兆載永劫の間我等がために幾千万の御身をすてられ候ふこと、骨をくだきても報じ盡しがたく候ふ。故に南无阿彌陀佛とよく稱れば、かならず御禮にそなはり申

すことに候。されば、この名號を申すにつゐて、まめやかに喜び申すこともあり、またさもなく候ひて申事もあり、聲をあげて高くとなへ申すことも、信心決定のうへにまふす念佛なれば、みな報謝にそなはるることにて候ふ。また人々つきあひの座中において、一念の信心おこることもあるべく候。さやうのときは、それを憶念稱名と御心得候ひて、内心に念ずるも報謝にて、聖人の御素意に相叶ふべきものなり。かやうに憶念の信心堅固なるひとをば、十方三世の佛陀も十方無量の菩薩、日本の地におわします一万三千七百餘社之神明も權現も大神も小神も、本師本佛の阿彌陀如來をたのみ念佛まふすところを大に喜たまひて、天魔破旬も惡鬼惡神もおかさず、生靈死靈(おカ)のほんりやうにもなやまされぬやうにと、影の形にそがごとく、夜る晝るつねに守護したまひてまもらしめたまふなり。故に淨土の三部妙典には、一切諸佛所護念經と説きたまへり。また聖人の和讚には、南无阿彌陀佛となふれば四天大王もろともによるひるつねにまもりつゝ、よろづの惡鬼をちかづけず、とおふせられ候ふことは、このい

はれなりと心得べきものなり。されば、彌陀の本願南无阿彌陀佛の妙躰は、一切の万善万行の物躰なれば、智慧も功德も慈悲も善根も、恒沙の法門ことごとく納りたる甚深の名號なるがゆへに、これをとなふるに、残るところの善根はひとつもなし。これによりて万徳所歸の名號ともいへり。然れば、この名號を稱するについて、他流の安心は多念を本とすとみへたり。あるひは觀念の念佛とこゝろえ、一念義多念義の諍ひあり。みなこれ自力のなせるところなり。されば當流の安心とまふすは、一念にもあらず多念にもあらず、唯念佛往生と深く信ずるをもて、宗の正義とす。すなはち、眞の知識にあひたてまつり、念佛往生の本願をき、開て、佛願にまかせ、一念發起するところをさして、信心決定とはいふなり。この信心と申すは、凡夫自力の迷心にあらず如來清淨の願心なり。願心はまことのねがひとよめり。行者のはからひを止めて、佛智不思議と信じて、一念も疑心なく往生を治定とおもひさだめて、南无阿彌陀佛の六字をとなふるをいふなり。この六字を善導大師釋していはく、言南无者即是

歸命亦是發願廻向之義 言阿彌陀佛者 卽是其行 以斯義故 必得往生といへり。この文のころを 當流の正義とはいふなり。されば、愚癡鈍根の衆生は 彌陀をたのみ、雜行をすて、正行に歸し、一心一向に後生たすけたまへとたのみ申せば、必定極樂に往生するなり。この道理なるがゆへに、われら一切衆生の 往生の躰はたゞ 南无阿彌陀佛なり。この南无阿彌陀佛の名號を 隨分聽聞候ひて、他力眞實の信心にもとづき、われひと一同に 往生淨土の本意をとげたまふべきものなり。あなかしこく。

延徳二年 九月下旬

江州慈敬寺本(中郡法順寺寫傳)、全集七八。

和歌集

1

師の跡を 遠く尋て 来て見れば 泪にそむる 紫の竹

(行状記)

○寶徳元年越後の烏屋野にて

2

かきおきし^{とむる(實如)} 文の詞に のこりけり むかしがたりは 昨日今日にて

○應仁二年四月廿二日夜御夢の記⁴に

3

かきをさし 筆のあとこそ あはれなれ むかしをおもふ 今日夕暮

4

かきとむる 筆のあとこそ あはれなれ わがなからんのちの かたみともなれ^{みよ(高)}

(浄照坊正本)

○應仁二年十二月仲旬高野山より十津河の道にて

5

奥吉野 きびしき山の そわづたひ 十津河をつる のながせの水

6

十津河の 鬼すむ山と ききしかど すぎにし人の あととおもへば

7

これほどに^{はげ(西光)} けはしき山の 道すがら のりのゆかりに あらでやはゆく

和歌集

十津河より小田井の道にて

8 谷々の さかりの紅葉 三吉野の 吉野の山の 秋ぞ物うき

9 山々の さがしき道を すぎゆけば 河にぞつれて かへる下淵

下淵より河づらの道にて

10 三吉野の 河づらつづく (飯見) いいがみの いもせの山は ちかくこそみれ

河づらよりして吉野藏王堂一見の時一年のうかりし事をいまおもひ出て

11 いにしへの 心うかりし 三吉野の けふは紅葉も さかりとぞ見る

○文明元年の御歌歎

12 五十五の としをむかへて この國の 法にあひぬる 縁ぞうれしき

○文明二歳庚寅二月廿日信證院御判

13 五十六は 定命なるに 我身なほ 眞證の證や ちかくなるらむ

14 みな人の 我とおこらぬ 信ぞかし たのむころも 他力なりけり

(正本、實悟集)

○文明二年二月廿八日御判

15 きけや人 むかしのゑんの あればただ おのれと信は おこるなりけり

16 極樂へ われとゆかんと はからふは 彌陀のちからは たのまざるなり

(正本光闍坊に在之、實悟集)

○文明三年春河内國久寶寺にて

17 くる春も おなじこずへを 詠れば 色もかはらぬ やぶかきの梅

18 年つもり 五十有餘を おくるまで きくにかはらぬ 鐘や久寶寺

(河内慈願寺正本)

○この比の御歌か

19 ききしより あらみごとなる 紅葉かな 詠にあかぬ 秋のよそほひ

(荒見聞光寺正本)

○文明三年七月十六日加州二俣坊にて御文に

20 つくづくとおもひくらしして 入あひの かねのひびきに 彌陀ぞこひしき

(此歌は後醍醐天皇御子八歳の宮御歌なるを、それは君ぞこひしきとあり、これは彌陀を戀しきとかへられ侍れば、可爲御詠也。實悟)

○文明三年七月十八日二俣坊にて御文二〇に

あつき日に ながるるあせは なみだかな かきおくふでの あとぞおかしき

○文明四年?の御文一三に

一念の うちにさだまる 往生を となへてのちと おもふはかなさ

○文明第四十月四日亡母の十三廻忌に

十三年を くる月日は いつのまに 今日めぐりあふ 身ぞあはれなる

佛果もおぼつかなくや侍りけんとして

おぼつかな まことのこころ よもあらし いかなるところの 住家なるらん

又還來穢國度人天の文を思召出て

いまははや 五障の雲も はれぬらん 極樂淨土は ちかきかのきし

○文明第五霜月廿一日御文三〇に

五十路に あまる年まで ながらへて この霜月に あふぞうれしき

(御文二)

27

三年まで 命のながきも 霜月の のりにあひぬる 身こそたふとき
のちの年 また霜月に あはんこと いのちもしらぬ わが身なりけり

○文明第五十二月八日多屋内方への御文き

ただたのめ 彌陀のちかひの ふかければ いつつのつみは ほとけとぞなる

代(專光)

のちの世の あるしのために かきおきし のりのことの葉 かたみともなれ

(行徳寺、東本願寺、及專光寺正本)

31

秋さりて 夏もすぎぬる 冬ざれの いまは春べと こころのどけし

○文明七年二俣坊に庭の木うへさせて

立置し_イ 庭の岩木も かはるなよ 又ふたまたの 春にあふべし

豊吉な_{野イ} ながれもきよき 二俣の 光はなをも すめる水かな

(縁 起)

○文明七年越前國栃河にて御齒の落ければ

おつる齒も 出入る息の たびごとに 南無阿彌陀佛の 聲ぞそみつ

(縁 起)

26

25

24

23

22

21

○吉崎の御坊にて

ほとくくと たたく船ばた 吉崎の 浪の上にも 彌陀たのむかな

はまさかの 濱坂 山のあなたに うつ波も 夢おどろかす のりのこゑかな 音イ

鹿島山 とまり鳥の こゑきけば 今日も暮ぬと つげわたるかな なりイ

草木まで さへイ 拂ひはてたる 濱坂の 嵐の音は 南無阿彌陀佛

○吉崎にてしやうこうち念佛申てとをるをきこしめして

おなじくは 彌陀の誓を 知せばや とてもとなふる 人のこころに

(實悟集)

○文明七年八月吉崎を立出で給とき

終夜 たたくふなばた 吉崎の 鹿島つづきの 山ぞ戀しき

海人の 炬火つでに ててイ こぐ船の 行衛もしらぬ 我身なりけり

(行狀記)

○文明八歳正月一日河内國出口坊にて

たらちをと 同年まで いける身も あけぬる春も はじめなりけり

同年六月二日よみ給へる

年つもり おやと同く ながらへば 月日をねがふ 身ぞおろかなる

右 改 め て

おやのとしと おなじくいきば なにかせん 月日をねがふ 身ぞおろかなる

(本善寺正本、六月二日御文に)

○文明九年七月一日出口にて日比痛める齒のおちければ

夏はきのふ けふ秋ぎりの 一葉おちて 身に志みてこそ 南無阿彌陀佛 (光善寺正本)

○文明九年九月十七日御文に

かきおくも ふでにまかする ふみなれば ことばのすゑぞ おかしかりける

○文明九年十月十七日教行信證大意を寫し給て

みなひとの まことののりを 志らぬゆへ ふでとこころを つくしこそすれ

○文明九年十月蓮淳に賜ひたる御文に

わがみただ つみのふかきぞ たよりなる 南無阿彌陀佛の 誓たのむに (縁起)

○文明九年暮冬仲旬の御文二に

ひとたびも ほとけをたのむ ころころこまことこのりに かなふみちなれ
つみふかく 如来をたのむ 身になれば のりのちからに 西へこそゆけ
法をきく みちにこころの さだまれば 南無阿彌陀佛と となへこそすれ

○文明第九極月廿九日の御文三に

六十あまり おくりし年の つもりにや 彌陀の御法に あふぞうれしき
あけくれは 信心ひとつに なぐさみて ほとけの恩を ふかくおもへば
いつまでと おくる月日の たちゆけば いく春やへし 冬のゆふぐれ

○文明十年極月晦日山科にて

ふる年も くるる月日の 今日までも なにかは祖師の 恩ならぬ身や
六十地あまり おくりむかふる 命こそ 春にやはらん 老の夕暮

文明十一年正月一日に

祖父の年と 同じよはひの 命まで ながらふる身ぞ うれしかりける

同年九月十二日夜月をみて

小野山や ふもとは山科 西中野村 ひかりただしき 庭の月影 (西本願寺正本、御文104に)

右 改 め て

小野山や おほやけつづく 山科の ひかりくまなき にはの月かげ (眞宗寺本)

○文明十三年十一月廿四日御文二に

このこと葉 かきをく筆の 跡を見て 法のこころの ありもとぞせよ

○攝州有馬にて(年記未詳)

つの國に いまだたえせぬ 有馬山 わく湯のかずは 神の誓ぞ (實悟集)

○文明十五年八月有馬に遊びて

音に聞く ますだの池を いま見れば つづみのかたち それとのみしる
岩坂や 七坂八たうげ こえすぎて ありまの山の 湯にぞつきけり

64

さかこえて ゑにし有馬の 湯舟には けふぞはじめて 入ぞうれしき

65

ふる雨に にとるとおもふ 湯の山の をとかしましき やどの谷川

66

年をへて 又ゆの山に 入身こそ 薬師如来に ゑにしふかけれ

67

老の身の 命いままで ありま山 又湯に入らん 事もかたしや

68

ゆの山を いづるけしきの 道すがら かまくら谷の おもしろきかな

69

日數へて 湯にやゑるしの 有馬山 やまひもなをり かへる旅人

70

七十に みる年まで 老の身の いける いつをかぎりの 世にはすままし

71

七十に はやみつしほの すゑの松 老のとしなみ 又やこえなむ

○山科勝境の御文二〇に

〔暮歸繪詞〕に「寄木述懐を題にしてよめる。七十地に身はみつしほの末の松このとしなみを又やこえなむ」と覺如上人の御詠を掲ぐ。

72

七十に つもる年まで いける身の かりのやどりを いつかいでなん

○法印號の兩脇に

八十路あまり最勝はイ 七十路に 身もみつしほの にしの海 舟路寄てふイをてらせ 山のはの月

73

なき跡に 我をわすれぬ 人もあらば なを彌陀たのむ 此ころをこせよ

○この比の御歌か

もろくの 雜行すてて みな人の 彌陀をたのまば 佛とぞなる

74

なきあとに 我を尋ぬる 人もあらば 彌陀の淨土にへ まゐりたるといへ

○文明十七の年を取つるに正十日節分なりければ

ふる年を こへぬるうへに 今日又 猶一春を かさねてやへん

75

あか月の ねざめの枕 おどろきて なくほととぎす かずくのこゑ

○文明十七始て郭公なきけるをきつて

○文明十七年六字名號題詠

七十地に 年はひとつも あまれども いつをかぎりの 世にはすままし

(正本、全集)

○文明十七年の御歌

七十地に 年はひとつも あまれども むかへぞおそき 彼岸のふね
かぞふれば つもる月日の やとしまで すみぞなれぬる やましのさと

(實如集)

○七十有餘のおりの御歌

西へゆく 月とつればや 老の身らくいの 七十地すぎて としのつもれば
老の身の 七十地あまり けふすぎて 雪ふりつもる としのゆふぐれ
我身はや 七十にあまる よはひにて 冬の日數も つもる夕暮
かぎりなく 七十あまり 年たけて ながらふ身こそ つれなかりけれ
いつまでと 七十あまり 老らくの いける命の つれなさの身や
七十に あまる我身の つれなさよ はや此冬も くるる年月

七十路に あまるれるいぞ老の としをへて またこの春の はなやみてまし

七十路に 年はあまりて けふもはや 一夜ばかりの 老のゆふぐれ

(實悟集、實如集)

○文明十八年三月八日出口より境の濱へ出で紀州に遊び九日かひ寺にて

いづみなる ちたての池を 見るからに 心すみぬる かい寺の宮

紀州長尾にて

河なべの 瀬々の浪もや 水たかく とをくながれて ながをなりけり

十日清水の浦々を見て

音に聞く 清水浦に 舟かけて(山口)のり 岩間がくれに 見ゆる嶋々

藤白峠より四方をながめて

藤白の 嶋や小嶋を ながむれば ただ布引の ちろきはま松

清水浦に一宿して

此嶋に 名残をおしみ 又かへり 月もろともに あかす春夜すがら(山口)のよ

95

十二日清水浦を出立とて
わきいづる 清水浦を けさははや ながめてかへる 跡の戀しさ

十三日ふけ井の浦の宿をたつとて

いづみなる ふけ井浦の 浪風(山口)に 舟こぎいづる 旅のあさだち

(正本、實悟集、山口氏正本)

○延徳二年正月十五日朝いるりのまにて

此春は みつはくむまで 年つもる 七十あまり 身こそ老ぬれ

(實悟集)

○延徳二年十二月和泉國にて

98 99 100 101 102

七十に あまるよはひの さかひにて 年やこえなん はじめ成けり
七十に 七のとしの はじめかな 春めづらしき さかひなるらん
八專も 寒も土用も 波風に みな吹うする 塚なりけり
七十七 よはひはなやぎ 老の身の 春やむかへん さかひなるかな
えにしあれば 又やくだりて 境なる 入志ほふるに 年をこそとれ

103

わきいづる 和泉のさかひ 志ほふるに くだりていりし えにしふかさよ

(實悟集)

○延徳三年亥辛正月 愚詠

104 105 106 107 108 109 110 111 112 113

津の國の むかしながらも けふははや 春といふべき 空のよそほひ
春くれば 難波のことも いふなみの 海こしみゆる 船の行すゑ
老らくの としをかさぬる 春くれば 花にあふべき 心こそすれ
いでそむる 空ぞほのかに 三日の月 けふはじめてや 春とあらるる
けふよりは 雪ふりそむる 山の井の うすがすみてや 見ゆる夕ぐれ
けふははや 日もうすがすむ 空春イなれば たれも心は のどけからまし
けふははや あくる雲井の 天つ空 かへるとつぐる 雁の一聲
七十に としはあまりて この春の 花をあひみん えにしふかさよ
つれなくも 七十七 いける身の 往來もつもの あとはあられじ
つのくにの さかひよりみる 住吉の 神のめぐみに あふぞうれしき

(正本、實悟集)

○延徳三年の御歌に

114 七十地に あまる我身も なたとせを なきてぞつぐる 郭公かな
115 いつまでか 七十地七つ 年たけて 今日にゑらるる 秋の七夕 (實悟集)

○延徳四年五月近松より厚ノ木の花五ツさきて實の成たるを持參ありしに

116 厚かの木に 實こそなりぬれ 世の中に ひろまるものは 彌陀の本願 (空善記)

○法印號の兩脇に

117 いまははや 八十地にちかき 老の身の いつをかぎりの 世にはすむらむ

118 後の世に 我名をおもひ 出しなば 彌陀のちかひを ふかくたのめよ (正本、實悟集)

○八十ちかきときに

119 いつまでと なみだ露けしき 墨染の(實悟)の袖 やそぢにちかき あきのほしあひ (實悟、實如集)

○年暮ぬればはや満八十になるべき事を法印號の脇に

120 佛にも 祖師にもよはひ おなじくて 八十地にみてる あくる初春

121 我なくば 誰も心を ひとつむきにイにて 南無阿彌陀佛と たのめみな人 (淨興寺正本、實悟集)

○同じ比の御歌

122 としのかず ねがひし身にも なりにけり やそぢにみてる あくるはつはる (實如集)

○明應元年 満八十歳 法印號の前記に(満八十は 明應三年也あそばしちがへらる歟。實悟)

123 八十地まで 命ながらふ 老の身の 月の船路を まつや彼岸 (正本、實悟集)

124 我なしと きかばやがても みな人は 南無阿彌陀佛と たれもたのめよ

○明應元年 満八十歳 法印號の兩脇に

古在東山靈地 雖立一流宗義 今ト山科林窓 欲遂安養往生 同彌勒慈尊曉 待畢命爲期夕

125 佛にも 祖師にもよはひ おなじくて いける八十地の かずぞたふとき (本誓寺正本)

126 極樂にイへ 我行なりと きくならば いそぎて彌陀を たのめみな人

○法印號の脇に

127 佛にも 祖師にもよはひ おなじくて 八十地いのちながらふ(實如)にみてる 身さへたふとし (正本、實悟集)

○明應三年十一月廿二日蓮如上人より基綱卿へ
御歌(未檢出)の返し。權中納言姉小路基綱卿

八十地まで 老を知らざる 君なれば 猶行末や 千世の春秋

(正本、實悟集)

○明應三年の御歌

明應三 八月八日の 八の字と 八十地のよはい おなじかりけり

(實如集)

八十地まで つもりしとしの あるしには 南無阿彌陀佛と いふほかはなし (實如集)

志はせ月 ひかずつもりし をいの身は 八十地にみてる 冬のくれかな (實如、實悟集)

いく春の 秋の月をも おくる身の 八十地につもる 老のゆふ暮 (正本、實悟集)

をいらくの 春秋をくる 志はせ月 やそぢにみてる 冬くれにけり (實如集)

○明應四年極月日 八十一歳

春夏は 日ながけれど いつのまに 秋冬くらす ほどのちかさよ

なにとてか 冬の日數の たちたるに 風あたたかなりし 庭の□明かな

老の身の むかしがたりを おもふにも ただ何事も □の世のなか

夢カ

□の世のなか

つれなやな 今年の冬も トシイ はや暮て 八十にいまは ふたつあまれり ば(本善)

年暮て 老の命も もろともに さゆる月夜と にしにゆかばや

八十地あまり 彌陀をたのみし たふとさに ころもの袖は 涙なりけり

彌陀たのむ 我身の心の たふとさに いつもなみだ ぬるる袖かな

年は暮 八十地に□る 餘カ 老樂の いつをかぎりの 世に は(脱カ) すままし (願泉寺正本、橋川集)

○明應四年予八十一歳なり又此冬暮は八十二歳なる間

如此詠哥云。 明應五年丙辰正月二日 八十二歳

(三首の中第二首は137に同二)

春立て 又や年へむ 老樂の 花にはえにし 我身なるらむ

彌陀たのむ 心ひとつの たふとさに いつもうれしき 涙なるかな (本善寺正本)

○明應五年八月七日御文129に

ふしぎなる 彌陀のちかひに あふもなを むかしのりの もよほしぞかし

いくたびか さだめしことの かはるらん たのむまじきは こころなりけり

○明應五年八月廿五日に芳野飯貝坊に御下りありて

三吉野の 吉野川 とま ころぞのこる 河づらの に(又本) すみてもみばや ここにいひがゐ

名もあるし 浪音たかき 吉野川 ちまたの里は むかひにぞみる (正本、實悟集)

○明應五年の御歌

年たけて 八十地にみつは あまる身の いつをかぎりの 世にはすままし

八十地には 三とせはあまる けふまでも いつをかぎりと 命つれなき (實如、實悟集)

○同 じ く

年暮て 老の齡を かぞふれば 八十地に三とせ あまるつれなさ

彌陀たのむ 心ばかりの ひとつ たふとさに なみだもよほす 老の袖かない 墨染の袖

我なしと きかばやがても 一むきに 南無阿彌陀佛と たのめみな人 (本善寺正本)

○明應六年五月十八日 八十三歳 六字の尊號のおくに (五首の中第四、五首は126、151なり)

南無といふ 二字のうちには 彌陀をたのむ ころありとは たれもあるべし

みな人の たすけたまへ ひしとたのむと まうすをイ いふならば 彌陀はありてや すぐひたまはむ

眞實の 信心ならでは のちの世の たからとおもふ 物はあらじな (正本、實悟集)

○この比の御歌か

南無といふ 二字の内には をのづから 彌陀をたのみし まん(實如) ころあるべし

阿彌陀佛と まふす御名こそ たふとけれ 人をたすくる 法のちかひな(實如) ちかひなりけり

一念に 彌陀をふかくもイ 阿彌陀をふかく 信すれば やすく浄土へ にイ むまるとは忘れ

發願の 廻向といへる そのころ 衆生攝取の 濟度イ すがたなりけり (正本、實悟集、實如集)

○明應六年十月十四日御文 133に

八十路あまり をくる月日は けふまでも いのちながらふ 身さへつれなや

あつらへし 文のことの葉 をそくとも けふまで命 あるをたのめよ

○八十有餘の御歌

年月の つもりくゝて けふははや 八十地あまりの 初春のそら

八十地あまり をくりし年の 春秋を 昨日けふとや おもひぬる哉 (正 本)

八十地あまり ことしもつれなく いける身の いつをかざりと まつぞひさしき

八十地あまり ことしもつれなく いける身の いつとさだめぬ 松風の音

八十地あまり 春秋をくる 月日こそ けふにあらるる 年も暮けり

としつもり 八十地にあまる をひらくの あすともわかぬ ゆふ月のそら

このごろは 八十地にあまる 冬くれて 春をもまたぬ 老らくの身や (實悟集)

○同じく

年月の つもりしことは ちらねども 八十地にあまる 老らくの身や

春秋を なにとすぎにし ことしかな としは八十地に あまるつれなさ

西へゆく 月とつればや をいらくの 八十地にあまるとしは 年を(實如)あまるさかひに

あはれなり くれゆく年の 日かずかな 老のつもりは 八十地あまれば (實悟、實如集)

○同じく

八十地あまり をくりむかふる 老の身の いつをかざりの 世にはすままし

このごろは つれなくもイ やぞぢにあまる をいの身の いつをかざりと 世にはすままし (實如集)

○明應七年正月一日におもひいづるま

たぐひなき 佛智の一念 うることは 彌陀のひかりの もよをしとるイ志れ (實悟集)

○明應七年初夏仲旬第一日御文一廿に

彌陀の名を ききうることの あるならば 南無阿彌陀佛と たのめみなひと

○男子も女人もの御文一五に(三首の中初首は一五なり)

ほれくくと 彌陀をたのまん 人はみな 罪はほとけに まかすべきなり

つみふかき 人をたすくる のりなれば 彌陀にまされる ほとけあらじな

○明應七年子月五日御文一廿九に

老樂の 立居につきての けくるしみは などかねがはん(實如)ただねがはしき 報土往生

○同じ比か

をいらくの おきねにつけて くるしみの ただねがはしきは 西の彼岸 (正本、實悟集)

○明應七年十一月十五日御文(未検出)に

後の世の かたみのためにイ なれよとて 筆をつくして かきぞをきぬる (實悟集)

○明應七年十二月十五日法敬坊空善兩人に賜ひたる御文(二)に

老が身は 六字のすがたに なりやせん 願行具足の 南無阿彌陀佛なり

○明應八年三月三日吉野の花を人の折て參らせしを御覽して

さきつづく はなみるたびに なほもまた ただ(實悟)いと(遺) なほねがはしき 西の彼岸

をひらくの いつまでかくは や なまし(遺) むかへたまへや 彌陀の浄土へ

けふまでは 八十地に五つ いつつに(遺) あまる身の ひさしくいきしと 忘れやみな人

○明應八年三月十日に

我死せ(遺)なば いかなる人も みなともに 雜行すてて 彌陀をたのめよ (實如集、實悟集、遺徳記)

八十地五つ 定業きはまる 我身かな 明應八年 往生こそすれ (實如集、實悟集、遺徳記)

(此後は御歌もなかりき。實悟)

御詠歌月日知らざる分

○六字尊號の奥に

かきをきし 念佛の功の つもりなば にしの浄土は たれもゆくべきし (正本、實悟集、實如集)

○年時不明の御文の奥に

みな人の 南無阿彌陀佛と となふれば 南無阿彌陀佛に むまれぬはなし (御文一〇六)

極樂は 日にく近く なりにけり あはれうれしき 老のくれかな (御文一〇八)

○下間上野法名蓮秀菊壽といひし時燈臺のもとに侍ると聞召て

よるごとに 柱にそふる 影みれば たれもそへとや 菊壽なるらん (實悟集)

○下間藏人自在を進上して後に往生せしに

かたみには やいはん(實悟) これをつくりし 藏人が 命はさらに 自在ならねば (實如、實悟集)

○ この葉ちる にはの山路を めぐるにも わが身ににたる 老のあはれさ花のゆくすゑ(實如)

(實悟、實如集)

(この歌山科南殿の庭にてあそぶす、駿河入道善宗體物語也。實悟)

やましなを 朝たつ空の 道すがら けふにしらるる 年も暮けり

(實悟集)

○ 春たつと いふよりはやく 三吉野の(脱カ)。やまもかすみて けさはみゆらん

(正本、實悟集)

(但前句に一句違也、可略歟。實悟)

雪ふれば 春もちかげに みよし野の 花のおもかげ 思いでけり

(實悟集)

○大坂の事をあそばしける御歌(實悟、實如集)

千代やへん 花松うへし 大坂の ひかりはなをも 生玉のみやもりイ

(正本)

松花うふる(實如)

をませやイ

みな人に 彌陀をたのめと 夕浪の 河をとたてて みゆる大さか

(正本)

大さかへ のぼらんとおもふ みちよりも 彌陀をたのまんめる(實如) 心あるべし

(正本)

○同 じ く (實悟集)

いく玉の 神のめぐみの 志宜の森 よそやことしの □し大さか住カ

いくたまの 神も久しき このところ よみよかりけり 志ぎの大さか

いくたまの ひかりかかやく 志ぎのもり みちもひろげに みゆる大さか

老らくの 命ぞのぶるイのかずます 生玉の ひかりにあへる 春の大さか

(正本)

みな月の 昔ながらの はらひして いく玉まつる 志ぎの大坂

○三月三日住吉の濱にて

住吉の ちかひかはらぬ 海なれば ひく志ほみづの ほどのとほさよ

(實悟集)

○ このたびは 不思議に命やまひながらへて 又きてみくる 堺りけりイなるらん

(實悟、實如集)

○六月十七日に

208

あすはげに 我たらちをの 日なりけり 昔をおもふ なみだふかさよ (實悟集)

○郭公

あさぼらけ 雲井のほかの 郭公 なく一こゑの とをくきこゆる

如宗禪尼の返歌

よゐながら あけゆく空の 郭公 雲のいづくに なきてすぐらん (正本、實悟集)

○

あらたまの 年のはじめは を 祝とも 南無阿彌陀佛の を 思ひ こころ わするな (實悟集)

うれしやな たふとやとこそ などぞ いはれけれ る 南無阿彌陀佛の こゑの ひまには (實悟、實如集)

彌陀たのむ 人の心を たづぬれば 南無阿彌陀佛の うちにこそあれ (証如本)

彌陀たのむ 人の心の たふとさに なみだをのごふ 墨染の袖 (正本、實悟集)

彌陀たのむ 我身ひとりの たふとさに なみだもよほす をいの(實如) ぬるる袖かな (正本、實悟、實如集)

彌陀たのむ わがみばかりは 佛にて 人のこころは いかがあるらん (實悟、實如集)

216

215

214

213

212

211

210

209

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

彌陀たのむ 人は の ねざめの は(實如) 郭公 我名となふる あげぼののそら (實悟、實如集)

彌陀たのむ 人はつりする 舟なれや つみをつめども 志づまざりけり (實悟、實如集)

彌陀をただ ころろひとつに たのみなば 浄土の往生 うたがひはなし (實悟、實如集)

彌陀をただ たのむこころの あるならば 浄土の往生 うたがひはなし (實如集)

彌陀をただ たのむこころの はじめより 我とをこらぬ こころとぞあれ (實如集)

みな人の みだの誓を たのみなば 西の浄土へ まいるとはあれ (實悟、實如集)

みな人の まことの信は さらになし ものしりがほの ふぜいばかりぞ (實悟、實如集)

みな人の 彌陀をたのむと いふならば 月の夜ふねの のりてわたらん (正本、實悟集)

みな人は 彌陀をたのめよ 後の世は のイ まいらんかたは 浄土なるべし (正本、實悟集)

みな人は 彌陀をたのまん 後の世は 月の舟路の ちかき彼岸 (正本、實悟集)

みな人は 彌陀をたのまん 後の世は 弘誓の舟に のらんとぞきけ (正本、實悟集)

極樂は 我人まいる 浄土なれば つゐにやあはん ひとつところへ (實悟集)

229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240

一念に 生まれゆくべき 極樂も おもひしらねば うれしさもなし (實悟、實如集)

一念に はや往生の ひまをえて うれしき事の ひまもなの身や (實悟集)

たかき山 ふかきうみにも 限りあり 彌陀の功徳を なににたとへん (實悟集)

ほとけには 花たてまつる ころろあれや つゝにめぐらむ 春のゆふぐれ (慈願寺正本)

法のみち たふときことは つきせねば いそぎむかへよ 彌陀の淨土へ (實如、實悟本)

かかる身を たすけたまへと 思ふとき わが往生は 往生やがてい さまざまとしれ (實如、實悟本)

つみふかき 人をたすくる 法なれば ただ一すぢに 彌陀をたのめよ (正本、實如、實悟集)

つみふかき 身と生まれぬるこそ ける うれしけれ さよ さてこそたのめ 彌陀のちかひを (實悟集)

きのふまで けふまでつくる 罪とがも 彌陀をたのめば たすけます (實悟集)

つみの身を たすけたまへる 彌陀なれば 噫よりほかの ことのはもなし (實悟、實如集)

不思議とも いふばかりなき ちかひ(實悟) ふしぎかな ふしぎふかしぎ 言語道斷 (實如、實悟集)

たのめとの をしへののりに ひかれつつ 彌陀たのむ身と なるうれしさ (實如集)

241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252

たのませて たのまれたまふ 彌陀なれば わがはからひの いらぬ成けり (實悟集)

たのませて たのまれたまふ 彌陀なれば たのむころも われとおこらず (實悟集)

もえいづる ちんろのほのほ けしかねて われとのりゆく ひのくるまかな (証如本)

うまれつく ころろの罪の を そのままに あらためたきは むべ たのむ一念 (實悟集)

たれとても 六字のころろ 知らば つみの衆生も たすかりぞせん や(實悟) (實如、實悟集)

名號は 如來の御名と 思しに 我往生の すがたなりけり (實悟集)

阿彌陀佛と なりしほとけの すがたこそ 我往生の ちるしなりけり (實如集)

阿彌陀佛 南無とたのまん 人はみな やがて佛に なる身とぞなる (証如本)

南無といふ そのふた文字に 花さきて やがて佛の 身とぞなりける (証如本)

いづるいき いるをもまたぬ この世なれば いそぎてたのめ 彌陀のちかひを 彌陀をたのめみな人(實如) (實悟、實如集)

あすもとは なにたのむらん 老らくの けふのゆふべも ちらぬ世の中 (實悟集)

いつまでか 老の衰婆には 有爲の命の は ながらへて 無爲の淨土の はい ねがはしきかな (實如、實悟集)

253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263

みがけただ 心のともを たづぬれば よきもあしきも かがみなりけり

(實悟集)

法の師の 筆と心をつくせども まことのみちを 志るものはなし

(正本、實悟集)

法の師の ふでとところをつくさずは 六字のみなを いかで志らまし

(吉田本)

法のみち ふでとところをつくさずは まことのみちは たれかおしえん

(証如本)

○

世の中の をくれさきだつ 定めなさ きイ いまぞありぬる 身こそつれなき た(實如)

(實悟、實如集)

この比は 經や本書を 人まねに いかなる人も もの(實如) よまざるはなし

(實悟、實如集)

いつまでか わが身ながらも つれなくて 命ながらふ 今の世の中

(實悟、實如集)

老の身 が のちまでたのむ みし(實如) たらちめの のこりて跡に ぞイ あるもかなしき

(實悟、實如集)

壽像とは いのちのかたちと かきたれば いたるうちに 我をみよかし

(實如集)

みな人の 壽像々と いひけれど 後にはつねに なげしにぞすむ

(實如集)

みな人の 法のみちをば とはずとも せめては馬の 物がたりせよ

(正本、實悟、實如集)

264

露の身の 命とともに ば(實如) きえはてて は(實如) その名ばかりや 跡にのこらん

(實悟、實如集)

265

あはれなり 老のやまひの くるしみは 前世のむくひ むなし からねば (吉田本)

○

266

かたみには 六字の御名を とどめをく わがのちの世に なからん世には これを(實如) たれももちあよ (實悟、實如集)

267

われなくば 誰も心を ひとつにて 彌陀をたのまん 身ともなれかし (實悟、實如集)

268

われなくば 誰もこころを ひとむきに 彌陀をたのみて 後生たすかれ (實如集)

269

われなくば 誰もこころを ひとむきに 彌陀のちかひを ふかくたのめよ (吉田本)

270

われなくと たれもこころを ひとむきに いそぎて彌陀を たのめみな人 (實如集)

271

われなくて のちに哀と おもひなば 彌陀をたのみて 後生たすかれ (本善寺、正本)

272

なきあとに われを戀しと おもひなば 彌陀のちかひを たのめみな人 (實悟集)

273

なきあとに われを戀しと くイ おもひなば 彌陀をたのみし ころもつべし (實悟實如集)

274

後の世に 我を尋ぬる 人もあらば 彌陀の淨土に あるとこたへよ (實悟集)

275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285

わかなをも としをつむにも 老樂イ 此春の 春のはじめの さかひなりけり (實悟集)

日にそへて さきぞまされる にはの梅 匂にふかき あさぼらけかな (實悟集)

ながむれば くもるともなき 春の夜の 月にかすみて かへる雁がね (正本、實悟集)

春の日の くもるけしきは ときなれや かすむはけふの 花のゆふぐれ (正本、實悟集)

櫻花 さかぬさきより にはほふらん 木の本くらく かすむ夕暮 (實悟集)

日々に猶 みどりをそふる 春木立 色こそまされ 庭のふし松 (正本、實悟集)

わがねがひ 人のおもひも みつしほの に ひかれてうかむ 波の下草 うきイ (實悟集)

郭公 なくとは人の つげしかど けふぞは あらたに じめて 聞や初音を (正本、實悟集)

みねの松 谷のかしは木 いかなれば おなじあらしに おとかはりけり (証如本)

五月雨は つゐにぞあがる けふの日の 空もくれゆく 雲のよそほゐ (慈願寺正本)

秋たつと いふよりはやく けさははや さきこそいづれ 朝がほの花 (吉田本)

286 287 288 289

ふりにけり は(實如) 軒端のよそに をとありて 苔よりおつる 玉あられかな (實悟、實如集)

ながむれば くもるともなき 秋の夜の 月のひかりに わたる雁がね (正本、實悟集)

秋すぎて 冬きにけりな 神無月 老のなみだや まづゑぐるらん (實如集)

はつ雪に 老のゑらがを ならぶれば いづれもおなじ 白妙にみゆ (實悟集)

○文明十一年正月朔日に雷のなりけるに
あらたまる 春にかみなり はじめかな

竺一檢校まいり脇をぞ申ける
うるほふ年の 四方の梅がえ

○文明十八年二月十日紀州に遊ぶ序に御かぐら峠にのぼりて
かけてみん 御かぐら山の たうげ哉

装束松とて松もと四五本だちにてありけるを見て

きてみれば 装束松の 御前哉

(御文 121)

○七夕の發句に

ぬれなれし 袖ひこ星の あふ夜かな

(實悟集)

○信濃國へ御下向の時、岩井河原と云所にて牛の多くありつるをみて、御供にありし本誓寺の正順口ずさみける

けだものの おほくの子ども 引つれて

とあるをさかせ給て御尋ありけるに、ありのまゝに申あげたりけるに、蓮如上人つけさせ給ける

ひとりあるだに うしとおもふに

(實悟集)

解

説

○御文の眞筆本

信憑するに足る完全なる御文の輯録を作らんとするには、その眞筆本に據るべきは勿論であるが、不幸にして御文の眞蹟は既に多分に散佚して、現存するものはその數僅かに六十通内外であらう。之につきて特筆すべきは、大正十四年三月龍谷大學出版部より發行せられた禿氏祐祥氏の編輯に成る

『蓮如上人御文』

と題する複製本一帖である。大正十三年十一月京都に於て催された第十回大藏會展觀に際して、御文の眞蹟が諸方より蒐められた。其中より優秀なるものを撮影印行せられたのが此帖で、二十三通を收めてある。

此帖に於て當時知られた眞蹟の大部分を網羅しあるが、當時の選に漏れたもの及び其後の發見にかゝるものを集めると、同様の複製本をなほ一帖作り得るほどある。中に就いて橋川正氏が雜誌『佛教研究』第七卷に報告せられた、越中赤尾の行徳寺に傳來する

蓮如上人自筆の御文一帖

は貴重なるものである。橋川氏の記述にある通り、此帖は美濃紙形方冊本で、内題として紙の左側上邊に「消息文明第五第六」とあり、右下隅に「兼壽」と自署あり。次紙には左記の如く目録がある。

一當流安心沙汰事 (文明第五十二月十二日)。(帖内二ノ二)

- 一 福田門徒信心事 文明第五十二年十九日 45
- 一 霜月報恩講事 文明第五霜月廿一日 39
- 一 一向宗トイフイハレナキ事 文明五年九月下旬第二日 30
所送寒暑五十八歳(帖内一ノ一五)
- 一 多屋内方教化事 文明第五十二年八月 五十八歳(帖内二ノ一) 40
- 一 霜月報恩講沙汰事 (文明第五十月三日) 36
- 一 多屋坊主述懐事 (文明五十二年十二月十二日) 42
- 一 對名號安心事 文明六三月三日(帖内二ノ七) 55

本文は墨附二十五紙で、每半葉九行詰、各章書出しの面は多くは八行、裏面で十行詰のところ二三紙あり。往々塗抹又は修補せられた箇處あり。本文によりて目録の下に年記を挿入したが、年記を闕くもの三通あり、其は括弧内に示した。之によりて見るに、八通の次第は所作月日の順になりて居らぬ。第四通第五通に「五十八歳」とあるは明かに五十九歳の誤である。此等の事及び一般の體裁より觀て、此帖は草稿ではなく清書本たることは疑ない。帖内御文と比較するに、第一通帖内二第八通帖内二は著しい差異を見出さぬが、第四通帖内一第五通帖内一は大に異なり、是は初稿に屬し、帖内のは大に改められてある。

本帖御文と同年代比に下間安藝蓮崇が御文十數通の寫本此輯録の事は後記述するを作り、蓮師は安藝の請により其帖に親ら端書を書して居られるから、本輯録の出來た動機は蓮師が蓮崇所寫本を見られたに

ある歟と推する餘地がある。そは兎に角に、蓮師の手許に所作御文の草稿なり控本なりが多分に保存せられてあつたことは、『空善記』延徳三年比の條蓮如上人に「加賀ヨリ出口殿山科殿マデハ御文ノ一々ニ美濃殿ニヨマセマイラセタマヒテノタマハク、オレガシタルモノナレドモ、殊勝ナリ」とあるので明かである。其が如何なる體裁に纏めてあつたかは、『實悟舊記』行實に「蓮如上人塚ノ御坊ニ御座ノ時、兼譽御參候。御堂ニヲイテ卓ハ上ニ御文ヲオカセラレテ、一人二人乃至五人十人マヒラレ候人々ニ對シ、御文ヨマセラレ候。」とあり、また『空善記』明應八年三月九日の條行實に「慶間坊ナニゾヲヨミテキカセヨト仰アリ。畏テ御文ヲトリテ、御堂建立ノ御文ヲ次第ニ三通アソバンケレバ、アラ殊勝ヤ」とあるのを見れば、御文が多少體裁を具へた帖冊と成りて、尠くも赤尾の眞筆帖位のものであつたと推せられる。是が他日實如上人時代に下附御文の臺本となり、又五帖御文撰定の基礎となりたものであらう。不幸にして此貴重なる臺本は散佚して、赤尾行徳寺の外に傳へて居るのを聞かぬ。

赤尾の眞筆帖を除いては、蓮崇寫本に蓮師の眞蹟が端書の外尙ほ一通日野環氏の意ある。其他の眞蹟はみな一通々々獨立のもので、諸方に散見する。種々の探究者によりて發見せられたのを見聞の及ぶ限り列擧すると、左の五十四通である。勿論帖冊中のももの一通づゝ別に擧げた。算用數字は本書の番號

- 一 夢 中 文 大阪市 淨照坊藏 40 二 同 阿波林村 常圓寺藏 40
- 三 宗名略章 能登正院 西光寺藏蓮崇寫本 29 四 宗名章初稿 越中赤尾行徳寺藏眞本 30